

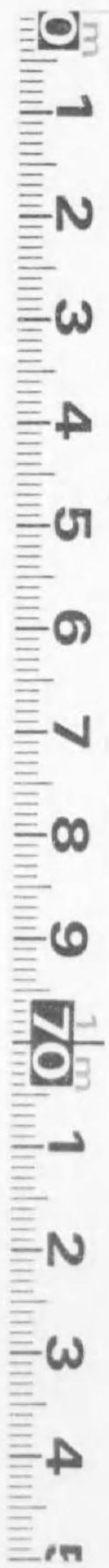
嶋川七石作
山本英春畫

戀こひの志こゝろがらみ

(終編)

大阪

樋口隆文館發行



始



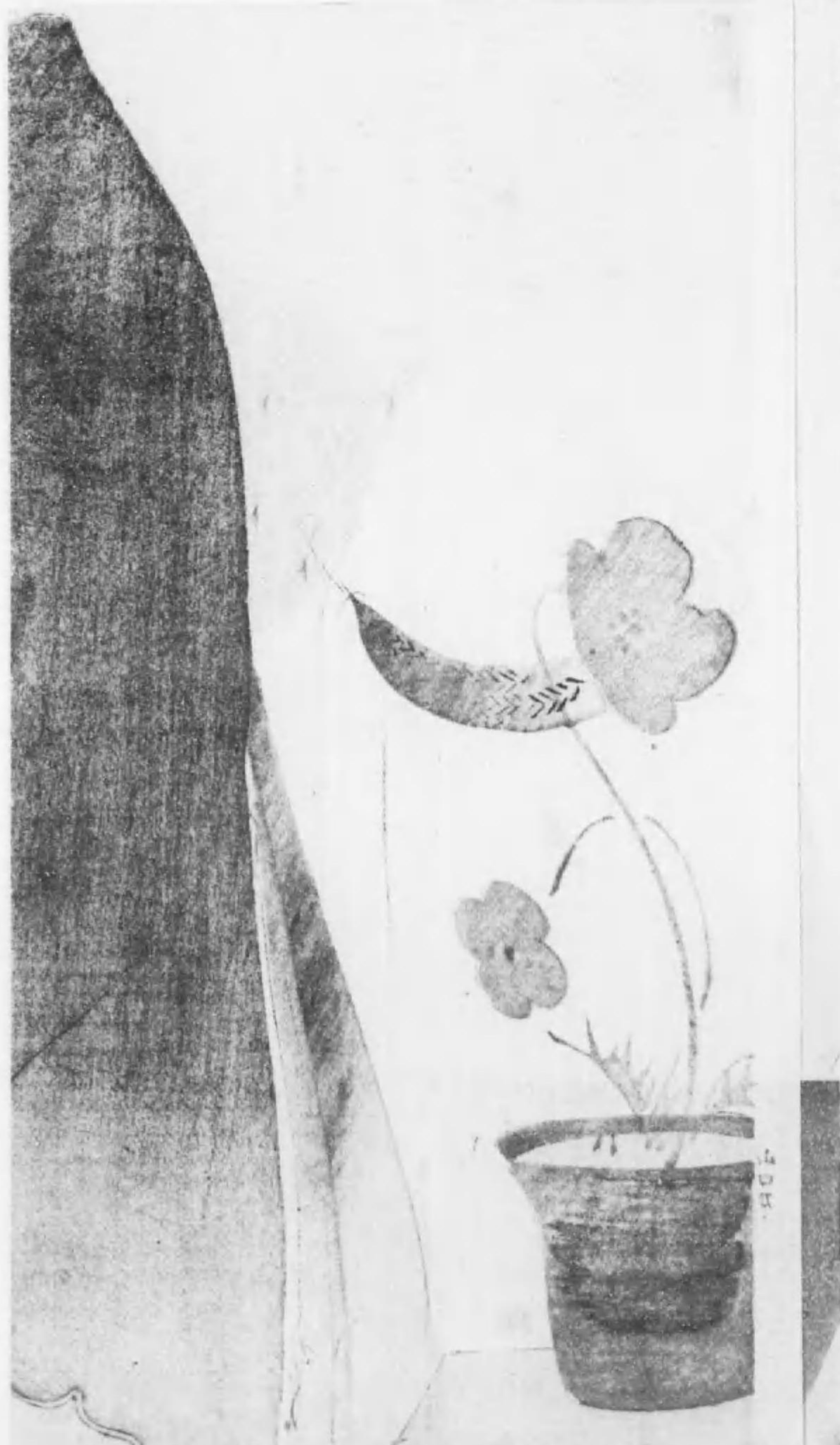
持116
491

戀こひの志こころがらみ

(編終)

山嶋
本川
英七
春石
畫作

大正
1086123
4.7.23
内交



■ 次目説小刊新館文隆口樋 ■

同 同 同 同 和 同 同 伊 嶋 同 同 同 羽 同 同 同 同 同 同 披
 田 藤 村 同 同 同 棟 同 同 同 同 同 邊
 天 銀 抱 同 同 同 荷 同 同 同 同 同 黙
 準 月 月 同 同 同 香 同 同 同 同 同 碑
 作 作 舞 同 同 同 作 同 同 同 同 同 作

戀浪二弱静予怒出其武命電男風七封女怪千
 のま人き の士 流首 枝
 意くの 人獅子
 藝
 地ら女人子 濤潮女系 薩妓窟子怪子

の大多てに上紙聞新の地各西東は物版出の館文隆口樋
 い白面極至もてん讀なれど付に物るたし博を評好

1086153

戀のしがらみ(續編)

島川七石

(禁無斷登場)

「一」

若者の言葉を黙つて聽いて居た網彦はニツコリ笑ひ。

「兎に角私しの宅へ参りまして悠くり御相談を致しませう」

「ウム左様しやう」

と、兄妹は網彦と蘭子の二人を自分達の快走艇へ乗り移らせ、荷足船には船頭の吉公一人を残して網彦は急いだ。

「さア貴女、遠慮せず此方へ入らつしやいよ」



華族の令嬢と云へば、多く深窓に育つて氣位ばかり高く、市中の婦人なぞに對しては、殊更らに尊大に構へるのが常であるが、此の令嬢は至つて氣輕るく、蘭子に對しても少しも氣の置けぬやうにして居るが、此の兄妹こそ維新の際國事に奔走して邦家の爲めに、大なる功績を残した薩南の志士、行友親彰の孫に當り、父は伯爵行友重隆と呼び、今は野に下つて居るが、幾度びか臺閣に列した政界の大達者で、母のしげ子は堂上華族北小路家の出であるが、伯爵夫妻の間には此の兄妹の子寶が在つて、兄は章と呼び、今年帝大の法科を卒業すべき俊才で、豫て外交官志願の青年であるが、妹は雪子と呼んで華族學院の才媛と謳はれ、社交界のクインと呼ばれて居る美人なのである。

「若様、今朝は馬鹿に早い御運動でございますなア、然し貴郎様のやうな御方にお目に掛つたのが、此の姉さんの仕合せでございます」
 兄の傍に座つて耳を傾けて居た雪子はさも満足らしく。
 「是れも何かの御縁なのよ、ねえ貴女、左様でせう」

両親から平素平民的の教育を受けて居る兄弟は、少しも心の置けぬやうに談話を進めて居る。

「恐れ入ります、平素でございますれば、お側へも参れぬ身分でございます」
 蘭子が頻りに謙遜する。

「アラ、左様云ふ舊い思想に囚はれては不可なくつてよ、成程、貴女のやうな社會に居る婦人は、多く賤業婦と云つて世間から指彈されますけれど、誰れも彼れも左様では在りませんわ、要するに其の婦人の人格から論じなければなりませんわ」
 新らしい教育を受けて居る雪子の論旨は流石に明白である。

「さうでせう兄いさん、貴郎も此の方が御自分の境遇を我れ〜に少しも隠さずに打ち明けられたのを聴いて、世間と同じやうに一賤婦として同情をお寄せになるのですか」

「イヤ……僕には僕の解釋が在る」
 と、妹の面を噴めた章は。

「兎に角多くの婦人は、斯う云ふ場合に自分の職業などは打ち明けないよ、夫れを此の蘭子と云ふ人は、何も彼も赤裸々に告白して居る、是れを以て見ても此人の平素が俯仰天地に耻ぬと云ふ自信が在るからだ、ねえ君、左様だらう……」

と、章から自分の面を覗き込まれると、耻かしさうに頭を下げた蘭子が。

「恐れ入ります……」

と、言葉を切つた蘭子が。

「不束なる田舎の賤業婦でございませうが、祖父の代までは槍一筋の家でございませうから、藝は賣りますが情けは賣るまいと心に誓つて居ります」

「さうでせう、僕もさう信じて居る、要するに貴女は立派な藝術家と云つても可いのだ」

此の一言を聞いた妹の雪子は何んと思つたのか。

「妾し斯んな姉さんが在つたら、どんなに楽しいでせう」

兄の章は、妹から斯う云はれると、忽ち其の面を眞赤にした、と同時に蘭子の胸中

は高い波を打つた。

「二」

先刻から兄妹が意味在り氣に語つて居る談話を聞いて居た網彦は。

「どうやら若様は此の婦人に思召しが在るらしいぞ」

と、早くも章の胸中を看破り。

「兎に角不思議の縁だなア」

奇しきは人の運命と網彦は頻りに驚いて居たが。

「伶俐の様でも世の中を知らぬお嬢さんは、一圖に此の婦人が氣に入つたらしいが多寡が新海の藝者だ、今の場合口ではあんな立派な事を云ふが、飛んだ喰はせ者かも知れねえ」

と、萬一の事があつては伯爵夫妻に申し譯が無いと、網彦は唯だ氣ばかり揉んだ居

るご。

「ねえ兄いさん、妾し本當に此の方がお氣の毒と思ひますから、何んとかして上げて下さいまし」

章は自分の心を讀まれたやうに再び面を赤くして。

「兎に角後で悠々相談をしてからの事だ、早い話しが、僕達二人は此の婦人の問題には第三者の地位に立つて居るんだから」

「アラ、兄いさんは平常の主張をお忘れになつたの……」

と、可愛らしい面を上げた。

「ハムム、馬鹿に熱心だなア、幾くからお前ばかりさう極めて居ても、肝腎の本人が不服だつたら詮議がないせ」

神の如き美しい精神を以て、可憐なる蘭子を救はうと思つて居る行友家の息子と令嬢は頗る熱心である、形勢が段々切迫するのを見た網彦は。

「若様やお嬢様のお情けは當人を助けました私しから厚くお禮を申しますが、何に

しろ本人の心も極らぬ中に御二方がお極め遊ばしても駄目でございますのよ、アハムム」

態と此の相談を笑ひに紛らしてしまはうとする。

「彦……お前そんな事を云はないで、妾の味方をしないと承知しないわ」

と、罪の無い要求をする片言雙語の裡にも厚き情けは籠つて居る。

「お嬢様ツ……ワ……妾くしは死んでも其のお情けは忘れません」

如何なる思惑が在るのか知らぬが、兎に角自分を花柳界から脱せしめやうとする令嬢の深き情けに感じて蘭子は我れ知らず嬉し泣きに泣き崩れた。

「アラ貴女……そんなに嬉しいの……」

と、ヂツと美しき蘭子の面を眼めた令嬢の雪子は。

「假令どんな事になつても、妾は貴女に對する最も親愛なるフレンドよ」

「……勿体なうございます」

「兎に角氣を大きく持つて居らつしやい、世の中はさう冷酷では在りませんからね

貴女……」

と、頻りに雪子が慰めて居る時、快走艇は千住大橋の下に停つた。

「さア、此處から上つて彦の家へ行かう、夫れから戻りには母ア様に何か生きた魚を持つて歸るのだから」

「へエ、畏りました……」

と、首肯いた網彦は一同と共に我が家へ戻つた。

「若様……どうぞ此方へお通り遊ばして下さいまし」

と、大事な出入先きの子息と令嬢であるから、下へも置かぬやうに女房が若者と共に奥座敷へ案内をすると。

「さう構つて下さるな……」

兄妹は軽く會釋をして奥へ通つたが、蘭子も云はれる儘に小さく成つて其の後に従つた、此の時章と雪子に挨拶をして見世へ戻つて來た女房のお時は、良人の網彦に向ひ。

「お前さん可い加減に私しを馬鹿におして無いよ、岡田川で助けて來たと云ふ彼の阿魔は、一体何處の馬の骨だい」
と、大きな聲で吐鳴りはじめた。

「三」

網彦の女房お時は、女心の淺墓にも、蘭子を良人の關係ある婦人と邪推して、燃ゆるが如き嫉妬の念が勃發したのであつた。

「お時、大概にして置けよ、見つとも無えや、奥には御屋敷の若様が在らつしやるのだせ」

と、網彦は別段氣にも留めず、苦笑を洩らした。

「見つとも無いとは私しが云ふ言葉だよ、あんな婦人はサツサと叩き出してお呉れ夫れが出来ないのなら私しの方から出て行くから」

段々聲が大きくなるので網彦はハラ／＼して。

「お時、モウ止しねえ、後とで判る事だから、第一斯んなことで云ひ合つて居るのが彼の女の耳にでも入つて見ねえ、折角助けて連れて来て、反つて厭やな思ひをさせる様なもんだ」

「フン、他人には馬鹿に親切だねえ」

と、女房は飽くまでも蘭子を疑つて居る、此の時奥座敷の入口に小さくなつて座つて居た蘭子は、夫婦の口論が耳に入つたので。

「アラ、御當家のお内儀さんは妾しを疑つて居らつしやる」
と、心を痛めて居ると、行友家の令嬢雪子の耳にも、夫婦の争ひが耳に入つたと見え。

「兄いさん、何んだか網彦かお内儀さんと口論をして居ますわ」
章は黙つて首肯いたが。

「僕にも先刻から判つて居るんだよ、然し餘り可笑しいから大詰まで見やうと思つ

て居たのだ」

「そんな無茶な事を仰しやつては此の方がお氣の毒ですわ、何んとかして仲裁をしてお遣り遊ばせ」

と、雪子が氣を揉んで居る時。

「どうも面目もございません、實は家内と一寸……」

網彦は斯う云つて頭を掻き乍ら入つて来たが。

「姉さん、心配をしなくても可いよ、モウ話しが判つたのだから」

「さうか、夫れなら可いけれども、餘り夫婦仲が好いと、一寸した事でも嫉けること見えるねえ」

外交官を志望する丈けあつて、章は態と相手に氣の置けぬやうにして居る。

「時に姉さん、先刻も若様やお嬢様が心配をして下さつたが、此の先お前さんはどうするの積りだね」

と、親切に云はれると蘭子は両の手を突いて。

「種々と御親切に有難うございます、兎に角、一旦新潟へ戻らうと思つて居ります」

雪子は一寸膝を進めて。

「アノ蘭子さん、妾しの様な者でも、力になりませうから、少しも遠慮せず、御自分の希望を仰しやいよ、何んなら廢業なさつてはごうです……？」

と、美しき面を蘭子の方に向け。

「お金の御心配は要りませんわ、失禮ながら妾しは邸へ歸つてお父う様や母ア様にお願ひ申して、お金は調達へますから、ねえ兄いさん……」

「ウム、蘭子さんが其の決心なら金の都合は直ぐでも出来る」
嬉しき兄妹の情けに咽び入つた蘭子は、熱い涙を膝の上に落して。

「其のお情けは死んでも忘れは致しませんが、妾くしの身体には云ふに云はれぬ事がございまして、今暫くは廢業が出来ないのでございます」

「夫れはどう云ふ譯けなのです、僕等兄妹は折角貴女の方にならうと思つて居るの

だから、少し位の借金の爲めに遠慮は不必要です……」

と、廢業を勧める行友章は頗る熱心である、章が斯く熱心である丈け蘭子は彼れの心の底に潜んで居る、或るものに氣が付いて當惑して居るのである。

「妾しには信さんと云ふ大切な良人が在るので、御兄妹のお情けで廢業した時萬一も……」

蘭子は斯う思つて深い溜息を吐くと。

「ねえ蘭子さん、さうなさいよ、さうして東京へ入らつしやい、廣い東京には女一人でも立派に生活の出来る道が幾らでも在りますわ」

と、事情を知らぬ雪子は、一生懸命になつて蘭子に廢業を勧めるのであつた。

「四」

行友家の令嬢雪子は、如何なる思惑があるのか知らぬが、頻りと蘭子に廢業を勧め

て。

「ねえ貴女、さう遊ばせ」

と、言葉を重ねるのは、蘭子の身に言ふに云はれぬ事情があると云ふも、そは一片の口實に過ぎなくて、唯だ自分達に出金させて廢業するのを遠慮して居ると信ずるからである。

「有難うございますが、實は妾しの勤めて居ります抱へ主にも、非常に恩がありまして、今急に廢業致しますのは、今日までの恩に反きますばかりか、貴方様達に借りたお金を返して頂きましたら、抱へ主は屹々と多くのお金を貪らうと致しますから……」

と、心にも無く辭退をする。

「お金なんか少し位餘計要つても構ひませんわ、夫れより貴女悪い事は申しませんから、正業にお就きなさいまし、斯う申しては失禮ですが、朱に交はれば紅くなりますから」

斯くまで熱心に勧められるので蘭子は兄妹の厚き情けを感謝しつつ、途法に暮れて居ると。

「お嬢さま、貴女様や若様の御親切は當人も喜んで居りますが、斯う云ふ稼業をして居りますと、様々の事情がありまして、右から左りと云ふ様な譯には參らぬものでございますから、兎に角新潟へ戻して、本人の自由に任せたら如何でございませう」

網彦の主人も、蘭子が兄妹の勧めを言下に従はぬのは、他に大なる事情があるものと信じて口を出した。

「左様だねえ、誰れしも斯う云ふ稼業をして居る人は、多く悲しい境遇や、云ふに云はれぬ事情があるのだから、兎に角一旦歸國した上で、廢業したければ私し達は何時でも相談に乗って上げるから良く考へて御覽……」

「ア……難有うございますッ……」

俄破と其の場に泣き崩れた蘭子は。

「お嬢様ッ……」
と、涙の面を上げて。

「嗚ぞ馬鹿な女……恩知らずの女と思し召ませうが、妾しは斯うした不幸の身に生れ付いたのでございますから、どうぞ御勘辨遊ばして下さい」
神か佛のやうな人の情を仇にして歸國せねばならぬ蘭子は只だ涙に咽ぶのみであつた。

「本當にどんな境遇か知りませんが、妾しは貴女に満腔の同を寄せますわ」
と、雪子も遂に涙ぐみ。

「兄いさん、夫れなら此の方のお國へ歸る旅費を都合して上げて下さいまし」
章は何んもなく残り惜し氣であつたが。

「夫れでは一と先づ國へ歸つて良く考へた上で、廢業しやうと思つたら端書一枚呉れ、ば何時でも私しの方から此の網彦を迎へに上げるから」
と、云つて紙に包んだ物を取り出し。

「是れは甚だ輕少だが歸りの汽車賃だから、遠慮をせず持つてお出で」
「種々と難有うございます」

蘭子は幾く度びか厚く禮を述べた後ち、此の家の主人網彦に向ひ。

「危い處をお助け下さいましたばかりか、種々御配慮に預りまして、何共お禮の申しやうがございません」

「イヤ、左様改めて禮を云はれる程の事でも無いよ、然し此處に在らつしやるお二方の御恩を忘れては不可ないせ」

「ハイ……」

斯く相談が一決すると章と雪子の兄妹は、蘭子に別れを惜しみ乍ら、再び快走艇で我が邸へ戻つてしまつた。

「是非東京へ出て入らつしやいよ、待つて居ますから」

「難有うございます、貴女様にも御機嫌好く……」
と、送り出して奥へ戻つて來ると、今は心も解けて居る女房のお時が。

「姉さん、先刻は厭やな事を聴かしたけれども、悪く思つてお呉れで無いよ」
「何んで悪くなぞ思ひませう、夫れよりも御主人様には、大變な御世話になりました」

と、厚く禮を述べた蘭子は、夫婦が無理に勸めるのを辭み兼ねて、其夜は同家へ一泊し、翌朝の一番列車で恐ろしかりし東京を後にして、夢の間も忘れ得ぬ實母の許へ歸つた。

「五」

一通の電報を手にして下村父子の家を訪れた兒玉お道は、今しも父子の前に其の電報を差し出し。

「ねえ信さん、此の電報では彼の子一人で歸つて来る云ふのですが、東京で何か變つた事でも出来たのでは無いでせうか」

「左様ですなア……」

躍る胸をば押し鎮めてチツと蘭子が實母の許へ打つて来た電報を眺めて居た信吉は徐ろに口を開き。

「成程……コンヤヒトリデナガラカヘカエルイサイオメニカ、リテモウス」
件の電報を読み終つた信吉は。

「兎に角蘭子さんは東京を一人で出發したには違ひありませんが、電報では何う云ふ譯けで一人で歸へられるのか判りませんなア」

「一緒に行つて居るのが桔梗屋のお内儀さんで、お客が例の野口ですから、何にか變つた事でも無ければ可いと思つて居るのですが、信さんは此の電報を見て如何思ひますね」

「僕にも見當が付きませんが、兎に角、何か事情があるのでせう、夫れで無ければ蘭子さんお一人で歸つて来る譯がありません」
「私しも左様思つて居るのでございます……」

と、お道は心配さうであつた、すると徳平翁は。

「新潟からは何んとも云つて来ませんかお道さん……」

「え、何とも申して参りません」

「ハテ妙だなア」

徳平翁は暫く腕を組んで考へて居たが。

「どうも變だなア、俺は信吉と一緒に蘭子さんと逢つた時には、確に野口とモウ

一人の婦人が同行して居たが」

と、小首を傾けて稍や暫く思案に耽つて居た徳平翁は。

「信吉、確に蘭子さんの身の上に変つた事があつたに違ひ無い、然し乍ら一人で實家へ歸つて来られると云ふのであるから、あの野口の奴に何か要求されて断りやうが無いので逃げて来られるのだらう」

長年苦勞をして居る徳平翁は、蘭子の發した一片の飛信に依つて概略の想像を付けて居た。

「如何したものでせう……」

實母のお道が頻りと心を痛めて居ると、信吉は前へ乗り出して。

「御安心なさいませ、及ばず乍ら私に達父子が附いて居ますから、抱へ主の方で、理不盡な真似でもしたら承知しませんから」

「何分宜しくお頼み申します」

と、頭を下げてお道は。

「夫れでは本人が戻りましたら、話しの様子で御相談に上りますから、何卒力に成つて遣つて下さいまし」

「仰しやる迄ありません、夫れに先日もお話し申した通り、蘭子さんが歸つて来れば、直ぐに桔梗家へ借りた金を返へして、蘭子さんは伯母さんの傍へ連れて来ます」

と、三人は種々相談に時を移したが、旋がてお道は我家へ歸つてしまつた。

朝上野を發した一番列車が驛へ着く十分ばかり前に信吉は、戀しき人の出迎へに出

た、待合室にはお道も先きに來て居たが。

「信さん態さく、恐入りますねえ」

「如何致しまして……」

一時は互に胸中を疑ひ合つた下村父子とお道の間は、雨降て地堅るの諺に洩れず、今はお道と信吉は眞の親子の如き親しみをもつて居る、折り柄暗の彼方に一聲の瀧笛が鳴り渡ると共に、列車は徐々とホームに入つて來てヒタリと停車した。

「蘭子さん……」

其の姿を逸早く認められた信吉が聲を掛けると、慌て、降りて來た蘭子が。

「オ、信さま……」

と、其の手を堅く握りめめたが、熱い涙は信吉の手の中へハラ／＼と落ちた。

「六」

慕つかしき母親や、戀しき男の姿を見ると、今まで張り詰めて居た氣も緩んで、蘭子の双眼から止度も無く熱い涙が流れるのであつた。

「蘭子や別段身体には變りは無いのかね……」

「ハイ……」

母からの質問に對して軽く返辭はするものと、恐ろしかりし昨日今日の事を追想すると、萬感交々小さき胸を襲ひ來て蘭子は泣くより外は無いのである。

「兎に角種々伺ひ度い事も申し上げ度い事も有りますから、私しの宅までお入來下さい……ねえ伯母さん、左様して下さいました、夫れに蘭子さんの大好きな角彌の蕎麥を取つて父も待つて居りますから」

斯る温かき言葉を聞くにつけても蘭子は自分を野口の心に従はさうと恐ろしい手段を取つた桔梗家の女將お初が恨めしいのであつた。

「夫れではお言葉に従つて左様云ふ事にしませう」
と、お道は嬉しき信吉の心盡しを喜んだ。

「どうも恐れ入ります……」
初めてニツコリ笑つた蘭子は、小さき胸中に千態萬狀の思ひを抱きつゝ、母と信吉と連れ立つて徳平翁の家を訪れると、三人の歸つて来るのを今かくと待ち草臥れて居る徳平翁は、我家の中へ出たり入つたりして居たが、三人の連れ立つて来る姿を認める。

「オウ蘭子さん……」
我れを忘れて走り寄つた翁は。

「良く歸らつしやつた、さア早く上つて下さい」

我が子の爲めを思つて、花柳界に身を投じて呉れた大恩人と、徳平翁は其の毛を執つて上座に座らせ。

「蘭子さん、貴女のお話しは後とで悠く伺ふとして、夫れより以前に俺達親子は貴女に向つてお禮を申さんければならん……」
と、昔し氣質の徳平翁は信吉と共に兒玉親子の前に頭を下げて。

「蘭子さん、委しい事はお母アさんから聞きました、夫れに就て、俺達達は口では到底お禮は述べられんが、何時かは屹つと御恩返へしを致します」
と、丁寧な語つた後ち。

「夫れに就ても貴女に喜んで頂き度いのは、信吉の嫌疑が晴れて無事に戻つた事です、種々貴女には御心配を掛けたが、お蔭で信吉に金を恵んで呉れた支那人の證明も得ました」

初めて夫れと聞いた蘭子は。

「アラ左様でございましたか……」

豫て自分が桔梗家から借りた金の爲めに、信吉が被害者と示談にして戻るやうなら二人の縁は是れ限りと云はれて居たので、今や蘭子は限り無き喜悅の面を上げ。

「信さんお目出度うございます」

「イヤ、種々御世話になりました、僕は終生貴女の御厚意は忘れません」
と、言葉を切つて。

「時に蘭子さん、僕の方にも種々お話しが有るのですが、貴女は一人で歸國をなさつたのですか、實は數日前に僕と父は東京の萬世橋で、貴女と或る者と三人連れで甲武線の電車に乗られるのを見ましたよ」

「アラ左様でございましたか、實は其の事で……」

と、有りし事を落ちも無く語り終つた蘭子は。

「左様云ふ譯でございますから、妾しは其のお方のお情けで今朝東京を發つて戻つて參つたのでございます」

と、語つた蘭子は、是れから先きの身の上を案じてシクシク泣き出した。

「ソ……左様云ふ目に逢つたのですか」

信吉は暫し双の腕を堅く組んで何か思案に暮れて居た。

「七」

稍や暫く深き思ひに沈んで居た信吉の沈黙は突如として破れた。

「蘭子さん……」

無念の拳を握つて、天井を見詰めて居た彼れは。

「眞度に偉い苦勞をなさいましたなア蘭子さん……」
と、唾を呑んで五体を震はせ。

「憎むべきは野口の奴です、彼れは金の威力に依つて、桔梗家の主婦に貴女の貞操を蹂躪すべく命じたに違ひありません、また桔梗家の主婦も幾ら金が欲しいとは云へ他の人權を無視して色魔の手先になつて居るとは、揃ひも揃つて許し難き奴です、何れ彼れ等には相當の制裁を加へて遣りますが、夫れ以前に貴女を母アさんの處へお迎へ申さなければなりません……」

蘭子は不安の面を上げ。

「夫れは逆も駄目でございます、何にしろ三百圓と云ふ借りた金を返へさなければ妾しは自由に長岡へも參られない身の上なのでございます、夫ればかりか、モウ桔

櫻家の方へも妾しが東京で居なくなつた事が知れましたらうから、屹々と母の方へ何んとか云つて来るだらうと思つて居ります」

と、蘭子は折角母親の處へ逃げ戻つた二三日を過ぎれば、又たもや新海へ呼び返へされると、心の中では血を吐くやうな思ひがするのである。

「御安心なさい、其の金は僕が調達して持つて來ましたから、立派に貴女を落籍して伯母さんの處へ連れて來ます」

「夫れでは信さまが妾しを……」
思はず大きな聲を出して歡喜の情を美しき面に泛べた蘭子は。

「妾しが廢業した事を知らせて上げたら、女神のやうな行友家のお嬢さまは嘸喜んで下さるだらう」

と、心の中に囁いた蘭子は。

「信さま、難有うございます」
改めて頭を下げると信吉は是れを制して。

「貴女からお禮を云はれる譯は有りません、貴女に借りた金を先方へ返へすのですもの……」

信吉は斯う云つて、喜ぶ蘭子の様子をヂツと眺め。

「時に蘭子さん、父も東京で飛んだ災難に逢ひましてねえ」
と、今日までの事を残らず語ると、蘭子は一々首肯いて。

「伯父さんも大變に御苦勞をなさいましたのねえ」

「何に、世の中は走馬燈と同じやうなもので一寸先きは闇だから、俺しは如何なる事に遭遇しても敢て驚かないが、今度ばかりは喰面つたよ、何にしる貴女が信吉の爲めに拵へて下さつた尊き淨財を盗まれたのだから」

徳平翁も當時の事を回想して、ホツと溜息を吐いた、此の時蘭子は俄に氣が付いたと見え。

「時に信さま、貴郎にお金を恵んで下さつた支那のお方は、若しや革命黨のお方は無くつて……」

「エッ……」

圖星を差された信吉は急に顔色を変へて父の徳平翁と顔を見合せて居たが。

「如何して蘭子さんはそんな事を聞くのです……」

「革命黨のお方なら大變な事が有りますから、貴郎にお知らせ申さうと思つて居るのです」

「ジ……實は革命黨員中一方の旗頭で李銳喙と云ふ人で、第二次の革命戦に南京城へ最後まで踏み止つた人です」

李銳喙と聞くと蘭子は益々驚いた様子であつた。

「其のお方は門司で日本人に殺されましたわ」

「何にツ、李閣下が……コ……殺されたツ……蘭子さん、貴女は如何して夫れを知つて居ます」

と信吉は息を喘づませた。

「八」

餘りの事に暫し呆氣に取られて居た信吉は、ヂリ／＼と膝を進め。

「蘭子さん、貴女は如何して左様いふことを知つて居られるのです、一体何處で聞いたのですか」

蘭子は戀しき信吉が餘りに愕いて居るので、今は自分も悲しくなり。

「實は斯うなのでございます……」

と、恐ろしかつた隅田川の船中で悪漢二名の談話を小耳に挟んだ事を落ちも無く語り。

「左様いふ譯けですから、貴郎の御恩人は今申した井上と云ふ奴の手に懸つて敢へ無き御最期を遂げられたに違ひありませんわ」

信吉は斯くと聞いて漸く安堵をしたが、李將軍が微傷を受けて歸京をして居る事は父にも語らずにあるから。

「マア好かつた、夫れにしても井上と云ふ奴は歸京して居るのは危険千萬だが、何んどかして一時も早く劉さんに知らせて上げやう」

心の中に斯う肯首いた彼れは。

「蘭子さん、其の外には何も聞いた事はありませんか」

「あります、モツと恐ろしい事を聞きました」

「何に、未だ恐ろしい事を聞いて居られる……事實ですか蘭子さん、威かしては不可ませんよ」

「ホ、ホ、何んで作り事を申し上げませう、實は李將軍ばかりか、其他の方のお身の上も頗る危いのです、現に一昨晚の如きは、皆さんは向島で何か御會合があつたらしいのです、夫れも今申し上げた二人の奴が覗つて居りました」

「夫れでは諸氏は刺客に現はれて居るのですね」

「左様でございます、妾しの耳へ入つたお名前は皆な新聞なぞで知つた御方ばかりです」

聽けば聞くほど同志の身の上が案じられるので。

「熱く教へて下さいました、僕は直ぐに今申し上げた劉と云ふ人に知らせて遣りませう」

「左様なさいまし、本當に油断も隙きも出来無いのですから」

「難有う……」

一寸頭を下げた信吉は。

「時に今度は貴女の御一身上に關する問題ですが、明朝は僕が新潟へ行つて立派に片を附けて來ます」

「種々と有難うございます、何分宜しくお願ひ申します」

兒玉母子は非常に喜んで信吉の前に頭を下げ。

「さうお話しが極りましたら、餘り勝手ですが我家へ歸らして頂きます」

「ア、左様ですか、何れ僕も後だからお伺ひ申します」
ニツコリ笑つたお道は。

「お待ち申して居ますから、屹ッ度お入来下さいまし、蘭子は私しが家に居るより貴郎の来て在らつしやる方が、どの位機嫌が可いか知れないのですから」

「アラおつ母さん……」

と、蘭子は思はず母を打つ真似をしたが、徳平翁が傍らでニコク笑つて居るのを眺めると、眞赤な顔をして頭を垂れてしまつた。

「下村さん、年ばかり取つても未だ本當に子供ですから仕様がありません」

と、お道は嬉しうに信吉と蘭子の二人を眺めて居たが。

「お互に早く孫を抱くやうに成らなくては楽しみがございませんねえ」

徳平翁は此の言葉に首肯さ。

「俺しも夫れ一つが楽しみで、世間の冷笑も甘んじて受けて居るのですよ」

と、云ひ乍ら、四人は楽しうに四方山の談話に移して居ると。

「御免なさい、下村さんと仰しやるのは此方ですか」

と、聲を掛けて表から入つて来た一人の婦人がある、其の姿を逸早く眺めた蘭子は

忽ち顔色を變へ。

「アラッお女將さんが……」

と、信吉の後しろへ隠れてしまつた、此の体を眺めた女將お初の双眼は、ギョロロと光つた。

「九」

來訪せし婦人の姿を眺めて早くも夫れと察した信吉は。

「蘭子さん、少しも恐れる事はありませんよ」

と、云つて蘭子の心を鎮めさせた後、徐ろに向き直り。

「貴女は誰何ですか……」

女將のお初は信吉を相手にせず。

「蘭子さんは此方様に居たの……？まあ可かつた、妾しごんなに心配したか知れな

いわ、大切な他人の娘さんだから、旅先で居なくなつたでは濟まないからねえ……」

と、猫撫で聲を出して俄に氣の付いた如く。

「アラ阿母さんも居たのですか、實は御客様の御同伴で、東京の博覽會見物に行つたのですが、お客様が酔つて居たもんだから、何か氣に入らない眞似をしたと見え、蘭子さんは姿を隠してしまつたのでせう、御客様も酔が醒めてから、悪いことをしたと云つて騒ぎ出すし妾しも心配だから、心當りの處を探したんですが、東京には居ないらしいので、兎も角歸つて見やうと、先刻此處へ降車て、御前さんの家へ行つて見ると、戸締りが嚴重にして在るから、近所で聞いた處、多分御當家だらうと云ふので遣つて來たのよ」

態ざと額の汗を拭きながら、家の中を見廻して居たお初は。

「本當に阿母さん、私達の稼業位氣苦勞の絶えぬものはありませんわ」
と、帯の間から細金の煙管と貰入を取り出し。

「一寸お火を拜借……」

と、蘭子の方を眺めながら二三服煙りの輪を吹いた後ち。

「夫れでは阿母さん我家でも良人が心配して居ますから」

と、云つて蘭子に向ひ。

「蘭ちゃん、夫れでは皆さんにお暇を告げて歸らう、夫れから皆んなへのお土産はお前さんの分も買つて來たから、心配しなくも可いわ」

飽くまでも親切らしく見せ掛けて此の場合蘭子に對しては、一言の不服らしい事は云は無い、此時お初の方に向き直つた信吉は。

「若し……」

と、聲を掛けて膝を進ませ。

「僕は下村家の親類の者ですが、蘭子さんはお歸へし申す事は出来ません」
斯う云はれると鼻先きに冷笑を泛べたお初が。

「オヤ左様でございますか……」

と、お初は此の男が蘭子の許嫁と察したと見え。

「成程、お前さんとしては私しに連れて行かれるのは困るでせうが、私しの方では大金を出して抱へてあるのだから、お前さんにはお氣の毒だが今から連れて行きま

すよ」
「何に、大金を出して抱へてある、夫れは藝妓としてだ、然かるに今度東京で蘭子さんにどんな事を勧めた、假令蘭子さんがお前さんの家へ歸らうと云つても、我れくが歸へさぬ、第一お前さんは強姦幫助罪に等しい罪を犯して居るでは無いか、そんな危険な處へ蘭子さんは遣る事は出来ない」
お初は此の勢に吞まれて暫し二の句が吐けなかつた。

「若し貴郎は何んど云ふお方か知りませんが、馬鹿も休み〜お云ひなさい、誰がそんな罪を犯しました、蘭子さん、お前そんな事を此の人へ云つたのかい、馬鹿らしい」
と、云つてお初は再び言葉を重ね。

「お前さんのやうな唐變木には判るまいが、蘭子は藝者だよ……玉代を貰ひ、お祝儀を頂戴してお客様のお酌をする身分だよ……其の藝者が酔つたお客に少し位惡戯をされたのを傍でお相手をして居る私しが強姦幫助罪かい……夫れよりも他人の抱藝者に悪い智慧を附けて自由廢業よりも酷い踏み倒しをしやうとする奴の方が出る處へ出れば罪になるのだよ、サア私も桔梗家のお初だ、斯んな真似をされて、ヘエ左様ですかと引下つて居ては多くの抱へを取締る事が出来ないから、第一番に私しを強姦幫助と云ふ名目で訴へて貰はう……」
信吉の言葉なぞにはビクともせぬ桔梗家の女將は、反て信吉の言葉尻を楯に取つて吐鳴り出した。

「十」

桔梗家の女將お初が、信吉の言葉尻を捉へて、反つて高飛車的態度に出ると、傍に

在つて如何なる結果になるかと心を痛めて居た蘭子は。

「ア、如何したら可からう」

口には出さぬが胸中の不安は歴然と其面上に現はれた、同じ思ひの徳平翁も、蘭子の母親お道も斯うなつては或は理があつて非に落ちはしないかと、ハラ／＼して居る。

「何んだつて其の筋へ訴へる……？、血迷つては不可んせ、僕の方では君の家に蘭子さんが前借があるから云ひたいことも云はずに我慢をして居るのだ、夫れども強て黒白を争ひたいなら貴様の方から其筋に上申したら可いだらう、蘭子さんは逃げて来たのは事實だが、お前の家の借金を踏み倒さうと思つて歸られたのでは無いぞ自分の操を全うしやうと思つて歸つて来たのだ」

相手の信吉が年に似氣無く落ち付き拂つて居るので、流石のお初も些さか態度を改ため。

「それでは蘭子さんを連れて歸らうと云ふのに、何にも文句を云は無くても可いで

せう、私しの方だつて好きでお前さん達と争ひ度くは無いのだから」

「夫れだから僕の云ふ事を聞いてから返辭をしたら可いでは無いか」

お初は忌ま／＼しやうに。

「お前さんの云ふ事と云つて、別に私しの方で聞く必要はありません」

「馬鹿に鼻息が荒いな、實は此處に居られるお母さんが蘭子さんの借りたお金を返へさうと云ふのだ」

此の一言には流石のお初も一寸驚いたが、今度はお道に向ひ。

「お道さん、夫れでは私しの方で用達したお金を返へして娘さんを廢業させやうと云ふのですか」

お道は始めて口を開き。

「左様でございます、今日まで種々御世話になりましたが、お金の都合が出来ましたから、此の娘を宅へ引取らうと思つて居るのでございます」

「アラ左様なの……夫れはお目出度いわねえ、さうなら左様と始めから仰しやつて

下されば、私しだつて厭やなことを口へは出さないのに、何んだか妙に角立つた事を仰しやるから、私しだつて賣り言葉に買言葉で、云ひ度く無いこと迄も口へ出たのですわ」

「イエ貴女さへ左様捌けて仰しやるなら、私しの方でも何も申し上げますまいが、親一人子一人の身の上ですから、萬一にも娘の身体に……」

と、お道は深き恨みはあるが、一旦金を借りたと云ふ弱味があるので、云ひたい事も控へてしまつた、するとお初は一同に向つて。

「さう話しが極つて居るなら、今日の中に廢業をしたら可いでせう、私しの方では貸した金さへ返へして貰へば直ぐに證文をお返へしするのだから」

信吉は此の一言を聞くど。
「伯母さん、善は急げですから、是れから新潟へ行つて蘭子さんの身体を表向き受取つて來ませう」
と、云つて母子に向ひ。

「僕も一緒に行きますから、貴女達も早くお仕度くをなさい、廢業届けを出すには本人が警察へ出頭しなければならんのですから」

促し立てられ兒玉親子はニツコリ笑つて信吉に向ひ。

「夫れでは御苦勞様ですが御同行を願ひませう」

呆氣に取られ居てた桔梗家の女將は。

「左様云ふ事なら、私しは一足先きに我家へ歸つて待つて居ますよ」
と、ブリ／＼怒つて一人先きに表へ出たが後しろへ振り返へつて。

「蘭子は我家の金箱だよ、廢業させるならさせて御覽、私しの方にも荒神様が附いて居るのだから」

と、獨語すると共に長い舌をペロリと出した。

桔梗家の女將お初は何か一人で首肯して新海へ歸つた、此方の徳平翁は信吉に向つて。

「信吉、あの婦人も初めは中々の勢ひだつたが、自分の方に弱味があるので、往生して歸つて行つたが、斯う云ふ事は少しも早い方がよいから、明日の一番で出掛けなさい」

蘭子は初めて安堵の胸を撫で降ろし。

「妾しは如何なる事かと思つて、気が氣ではありませんでした」

「ハ、ハ、ハ、何に此方は借りた金さへ返へせば可いのですから、愚圖々々吐かしたら警察へ突き出して遣らうと思つて居たのです」

「本當に種々と御心配を掛けまして相済みません」

と、お道は叮嚀に頭を下げたが、旋がて母子は信吉の家を辭して我が家へ歸り、久し振りに親子が枕を並べて温き夢を結び、夜が明けると信吉の來訪を受けて、三人は下り一番列車の客となつて新海へ向つた。

「ねえ信さん、絞めて此の子を桔梗家へ連れて行く時も、此の汽車に乗つて行つたのですが、同じ道を通つても、今日は何んだか極樂へでも行くやうな氣がしますよ」

と、お道は喜ぶ言葉の下から。

「妾しも何んだか嬉しくて……」

曩きには泣いて通つた道を、笑つて通過する蘭子は、心から嬉しさうであつた。

「ハ、ア、夫れも是れも皆んな僕の一身上を思つて下さつた爲めなのです」

と、信吉は軽く頭を下げた、頓がて列車が新海へ着くと、三人は腕車を列ねつゝ遊廓附近の桔梗家の前で降りた。

「信さん、此の家ですよ……」

表口は開いて居るが、斯る世界の習慣として未だ奥では眠つて居るらしい。

「ア、左様ですか」

と、首肯いた信吉は、親子と共に闕を跨いで。

「一寸頼みます」
案内を乞ふと奥の方から。

「ハーイー」

語尾を長く曳いて、何んもなく艶めきし返辭をしたが。

「アラ蘭子さんだわ……お前さんどうしたの、本當に縹緞の好い者は徳だわねえ、東京の様子はどうだったの」

肝腎の用も忘れて饒舌り出したのは同じ抱への吉奴であつた。

「サア、そんな處で考へて居ないで、早くお上りよ、皆んなはお前さんが歸つて來たら、ウンと奢らせうと思つて待つて居るんだわ……」
「体レコは如何したの蘭子さん……」

と、親指を出して薄氣味の悪い笑ひを洩らした、此の様子では抱へ妓はまだ蘭子が東京から逃げて歸つた事を知らぬらしい。

「妾しは皆さんよりお先へ一人で歸りましたから何も知りません」

「アラ、相變らず切り口上だよ此人は、サアそんな處に居ないで早くお上りよ、昨夜は銅茶屋で宴會があつて晩く歸つたから、小三姐さんも歌ちやんも蝶ちやんもまだ熱く眠つて居るわ」

と、饒舌り續けて居たが、お道と信吉の方へ面を向け。

「お前さん達は何んですか、用でもあつて來たの……」

蘭子はハツと思つて。

「吉奴さん、此處に居りますのは妾しと一緒に參つた者でございます」

吉奴も一寸面喰つた様であつたが、流石に此の社會に育つた丈け少しも驚いた様子も無く。

「アラ此の書生つばをお前さんが連れて來たの……」

此の時信吉は叮嚀に頭を下げ。

「甚だお手数ですが、御主人御夫婦に長岡から蘭子の親類の者が伺つたとお傳へ下さいませ」

其の言葉が終るか終らぬ中に。

「吉奴さん、何んな用か知らないが、私は気分が悪くて會ふ事が出来ぬから、蘭子だけを置いて今日は歸れと云つてお呉れ、朝つばらから見世先きでガヤ／＼大きな聲を出されては五月蠅くて仕様が無い」

と、突慳貪に吐鳴り立てるのは女將のお教であつた。

「十二」

様子有り氣の此の一言を聞いた吉奴は、一寸奥の方へ駈けて行つたが直ぐに戻つて来て信吉に向ひ。

「お前さん、今聞いて居た通り、お女將さんは氣分が悪くつて、今朝は會へ無いと言ふから、亦た出直して來たら可いだらう」
と、云つて蘭子の方に目を移し。

「お前さん、何を考へて居るんだねえ、早くお上りよ」

「……………」

蘭子がモチ／＼して居ると、屹つと面を上げた信吉は。

「妻君が病氣で逢へ無くば御主人でも可いのですから、一寸逢つて呉れるやうに取次で呉れ給へ」

「親方も留守だと云つて歸へしておしまひよ」

と、奥の方から女將の聲が高い。

「左様ですか……………」

信吉は暫く考へて居たが。

「夫れなら止むを得ませんから一旦歸ります、何れ後刻警官を立會として逢つて頂くから、其のやうに御主人に傳へて置いて下さい」

斯う云つて兒玉母子に一寸目配をした信吉が。

「サア行きませう、要するに會へぬと云ふ以上は、會ふべき方法と手段を執るより

と、起ち上らうとすると。

「お待ちなさい、お女将さんはお目に掛るさうですから」

吉奴も何んとなく女将の態度が可笑しいので、今は言葉使ひも叮嚀になつた。

「さうですか、種々變りますな」

信吉は殊更らに冷笑を泛べて。

「夫れでは奥でお待ち申ませう」

二人と共に奥の狭い座敷に案内されたが、茶も出さなければ、湯は勿論、蒲團も持つて来ない、さうして三十分を過ぎ一時間と経過も女将の姿も見せない。

「如何したのだらう、餘り馬鹿にするやうなら此方から歸りませう」

と、相談をして居る時。

「どうもお待たせしましたね、何にね、昨夜遅くまで客があつて其の相手をして居たのど、東京へ行つての間蘭子さんの身体に間違ひの無いやうに氣を使つて居たものですから、其の疲れが出て、今朝は頭が石のやうに重いのですわ」

外はありません、此方は現金を返済して廢業しやうと云ふのに、言を左右にして會つて呉れぬのですから」

「なんですつて、蘭子さん廢業をするのですか」

吉奴の驚くのを眼もくれずして。

「サア行きませう、却つて會つて呉れぬ方が、東京の出來事を警官達へ上申する機會が出来ました、幾ら此方で好意を持って居ても、惡意に解釋をされる以上は止むを得ませんから」

躊躇する母子を引立て、鬨を跨がうとする時。

「本當に喧しいねえ、吉ちゃん、夫れでは奥の三疊へでも通してお置き、我慢をして會ふから」

信吉は可笑しさに堪へると共に、女将自らには弱味のある事を知つて居るなど看破して。

「サア行きませう、如何もお手数を掛けて濟みません」

「アラ左様ですか、お疲れの處を早くから伺ひまして何んとも恐れ入ります」

流石に婦人は心が優しくしてお道が叮嚀に挨拶をする。

「然し蘭子さんにはお目出度い日なのだから、私しばかり勝手の事を云つても居られませんかよ……」

と、猫撫で聲を出した後ち。

「お道さん、夫れではお貸し申した金を頂きませうか」

「ハイ、種々有難うございました」

と、お道が嬉しさに徳平翁から受取つた三百圓を女將お初の前に並べ。

「是れは元金丈けでございますが、利息や何かの細かい御勘定は御精算をなすつて下さいまし」

「アラ左様ですか……」

と、件の現金を受取て一寸員數を調べた女將のお初は。

「モシ……是れは、たつた三百圓しかありませんよ」

と、セ、ラ笑つて、ボンと其の金をお道の前へ投げ返へした。

「十三」

此の有様を眺めたお道は忽ち顔の色を變へてしまつた、蘭子は餘りの事に如何になり行くかと、小さな胸を痛めて居る。

「お道さん、たつた三百圓ばかりの金で蘭子さんを連れて歸る心算りなのかね……」

と、曇み掛けた女將のお初は、三人の面をデロリと見上げた、信吉はお道親子が桔梗家から金を借りた當時の事を知らぬが、女將が先刻からの舉動は確に深き意味のあるものと、心の中に首肯して居た、此の時お道は我れを忘れて、デリ／＼と膝を進め。

「御内儀さん……仰しやる通り、此の金は三百圓でございますが、是金では不足な

の下ごさいませうか」

斯う云つて女將お初の返辭を待つ、お道は言葉を重ね。

「尤も三百圓のお金に對する利息はお拂ひ申す筈なので……」

ど、恐る／＼言葉を切る。

「當り前だよ……」

ど、空嘯いて蕘の煙りを輪に吹いたお初は。

「私しの云ふのは少しばかりの利息を兎や斯う云ふんちやア無いよ、私しの方で貸した元金を全部返へしてお呉れと云ふのだよ、お氣の毒だが、私しの家だつて金の成る木を持つて居ないから、お前さん達に貸した金だつて皆んな高い利息が附いて居るのだよ、だから夫れほど蘭子を連れて行き度いなら、貸した金を残らず返へしたら可からう」

意外の一言を聞いた蘭子は、堪り兼ねて前へ進み。

「お内儀さん、妾くしが御厄介に成ります時には三百圓のお金を拜借したのだと思

ひますが」

此の言葉の尾に付いたお道も。

「甚だ失禮でございますが、私しも蘭子の申す通り、三百圓だけお借り申したと思ひますが、萬一や貴女はお考へ違ひを遊ばして居らつしやるのではございませんか……」

フ、ンと鼻先きで冷笑したお初は。

「馬鹿を云つては困るよ、私しは未だ自分の爲た事を忘れる程老碌はして居ないよ」

「でも私しの拜借したのは眞ッ度く三百圓でございます」

ど、其の當時の事を細かに説き出すとお初は。

「夫れでは何かい、お前さん達は私しが貸しもしないものを貸したと云ひ掛りでも云ふと言ふのかい」

「イ、エ、左様云ふ譯けではありませんが、私しの拜借致しましたのは確かに三百

圓でございますから」

「お道さん、お前さんは顔に似合は無い恐ろしい人だね、私しの處から二百圓だけ詐らうとするのだね」

「どう致しまして、決してそんな譯けではありませんが」

と、二人の争いは段々大きな聲になつた。此の時屹つとお初を睨み付けた信吉は、聲を怒らして。

「モシ、桔梗家の御内儀さん、伯母さんは決して、借りた金を思ひ違ひなさるやうな方ではありませんが、貴女こそ何かと間違へて居るのでせう」

此の時女將のお初は忌ま／＼しさうに信吉の面を眺め。

「一体お前さんは何の爲めに斯んな處へ出酒張るのだね」

少しも騒がぬ信吉は双頬に笑みを含んでお初に向ひ。

「決して出酒張るのではありません、僕は兒玉家の親族ですから、蘭子の廢業するのに立會に來たのです」

凜乎として言ひ放つと、再び言葉を重ねて。

「兎に角徒らに水掛論をして居るよりも、伯母さんは貴女の家から金を借りる時には證文を入れてあるでせうから、其の證文に記入して有る金をお拂ひ申せば可いのでせう」

「夫れは左様ですよ……ですから私は三百圓では未だ二百圓不足だと云つて居るんだわ」

軽く首肯いた信吉は。

「さうですか、兎に角其の證文を此處へ出して下さい、夫うすればお互の考へ違ひが即時解決しませう」

と、信吉は両腕を張つて一喝を喰らはした。

退ッ引きならぬ信吉の言葉を聞いたお初は態々澁々して。

「夫れはお前さんの云ふ通りですが、私しだつて眞逆か証文に書いて無いものを餘計に受取らうとは云は無いのですから、其の心算りで居て下さい」

「さうでせう、ですから其の証文さへ一見すれば直ぐに判るでせう」

と、信吉は益々迫るのであつた、すると此の掛け合ひを聞いて居たお道は。

「あの時の証文さへ此處へ出せば何も彼も即座に判つてしまふ」

と、心の中に喜んで居ると、お初はチロリと信吉を見上げ。

「夫れではお前さん達は証文に記入してある金を拂つて行くのだね」

「左様でございます、斯やうな堅た苦るしい事を申したくは無いのですが、何しろ二百圓と云ふ大金の相違がありますから、私しがお手許へ入れましたあの時の証文をお出しなされて下さいまし」

と、お道は自分が桔梗家へ入れた証文には、確に借りた三百圓の外には年二割と云ふ利率を記した丈けであるから、語る言葉の端にも勢ひがあつた。

「アラ左様なの……夫れでは今此所へ持つて來ますよ」

と、云ひ置いてツカ／＼と奥座敷へ入つて行つた、後と見送つた信吉は兒玉母娘に向ひ。

「ねえ義家さん、此の家の妻君はあんな事を云つて居ますが、貴女方の思ひ違ひでは無いでせうか」

虫が知らすか下村信吉は、桔梗家の女將お初の状態が、思の外強硬である爲め斯う云つて母娘の返答を迫つた、するとニツコリ笑つたお道は。

「信さん、大丈夫ですよ、此家のお内儀さんは確に思ひ違ひをして居るのですから……」

と、少しも氣にして居ないが、信吉には未だ安心が出来ぬと見え。

「でも餘り此家の妻君の様子が變ですもの……」

と、初めて母と信吉の間へ詞を挟んだ蘭子は、四邊りを見廻して聲を潜め。

「アノお内儀さんは血も涙も無い人ですから、屹つと証文を出さずに金を受取つて亦た証文を出して二度の請求をする心算りだったのでせう」

「イヤ……」

と、頭を振つた信吉は。

「夫れなら先刻義母さんが此の金を出した時に、直ぐと受取る筈なのです、然るに不足だと云つて手にもせぬのは、何か巧んで居る事があるに違ひ無いのです……」
と、不安の面を上げた信吉は、お道の前に置いてある三百圓の紙幣をヂツと見入つた、斯う云はれるとお道も些さか氣に掛ると見え。

「成程左様ですなえ、一体此家のお内儀さんはどんな考へがあるのですせう」

「僕にも想像が付きませんが、要するに蘭子さんを歸へしたくないのです、けれども斯うして借りた金を返済すると云ふのを、詞を設けて受取らぬなら、僕にも夫れ相當の考へがありますから、安心して居らつしやい」
心許なく思つては居るものゝ、兒玉母娘に心配をさせまいとして居た、すると女將

のお初は茶碗酒でも飲んで来たど見え、両の眼許を眞赤にして、熱柿のやうな息を吹き乍ら、亭主の卵之助と共に此の座敷へ入つて来た。

「お前さん、此の人達程圖々しい人間は無いよ、蘭子を連れて来て無理に頼むから五百圓と云ふ大金を貸したのに、三百圓しか借りないと剛情を張つて、口先きで二百圓だけチヨロマカさうとして居るんだわ」

黙つて首肯いた主人の卵之助は。

「オイお道さん、お前はあの時に貸した金を三百圓だと云ふのか」

と、其の語氣は頗る荒い、お道は斯う云はれると一生懸命になつて。

「ハイ、証文に認めました通り、私は御當家から三百圓拜候を致しましたのでございませう……夫れをお内儀さんは五百圓だと仰しやいます」

其の詞の終らぬ中に。

「強情を張らずに是れを御覽な……」

と、女將お初が突き付けた借用証書を一目眺めたお道は。

「……これはッ……」
と、叫ぶと共に忽ち顔の色が變つてしまつた。

「十五」

お道が其の借用証書を手にして驚愕の聲を放つたのは無理も無い！、驚くべし三百圓の借用証が五百圓と變つて居るでは無いか。

「貴女、是れは違ひは致しませんか」

と、突き返へすと空ら嘯いた女將のお初は。

「違ふとは其の証文がかい」

と、お初は頭から冷笑を以て迎へて居る、此の時お道は一生懸命になつて。

「お内儀さん、此の証文には五百圓と記してありますが、拜借したお金は三百圓でございます」

ジリ／＼と膝を進めると、此の様子を眺めて居た蘭子は。

「母アさん、あの時此方様へ入れた証文には確に三百圓と妾し書いたのでございませうが」

如何にして此の証文が五百圓に書替へられたのであらうと蘭子の顔色は血の氣が失せてしまつた。

「馬鹿な事を云ふもんで無いよ、一体お前さん達は何んの積りでそんな馬鹿氣切つたこと云ふの、第一彼の時に私しの家では四百圓より貸す事が出来無いと云ふのを無理に頼むから五百圓と云ふ大金を貸したのではないか」

「アラ女將さん……」

餘りの事に蘭子が其の當時の事を物語らうとする。

「大概にしてお呉れ、夫れでは此の証文に押してある判はお前さん達のでは無いの……」

と、云つて証書の表をボンと叩き。

「お前さん達親子は腹を合せて私印私書の偽造行使をしたのだね」
此の時下村はお初が何處で斯んな生意氣な詞を覺えて來たかと心の中では可笑しさに堪へなかつたが。

「兎に角そんな事を何時まで云ひ争つて居ても仕様が無いでせう、僕が鑑定しますから、一寸其の証書を見せて下さい、僕だつて蘭子さんの手蹟は知つて伯母さんの判も知つて居ますから」

「アラ左様ですか、夫れでは貴郎一寸見て下さい、私し達は貸した金さへ返して貰へば文句は無いのですから」

ど、お初が差し出す証文を手にした下村は暫くの間は証書面を眺めて居た。

「成程、是れは蘭子さんの手であるし、押した判は伯母さんのだ」
ど、心の中で首肯て稍や暫くは言葉が途切れた。

「ねえ伯母さん、一体どうしたのです此の証書は」
お道はオロ／＼聲を出し。

「別にどうと云ふ事はありません、私し達は三百圓と云ふ金を拜借しまして、夫れだけの証文を入れたのですが、今見れば此の通り……」
ど、呆氣に取られて居る。

「さうすると貴女は此の証文に異議がありますか、あるなら辯護士を頼んで黑白を争いませう」

下村信吉は此の証書には何か深き秘密と犯罪が籠つて居ると看破したので、殊更ら語尾に力を入れて兒玉親子の決心を促した、するとお道は。

「餘り馬鹿く／＼しうございますから、左様云ふ事に致しませう、私し達は決して事を好むものではありませんが、餘り馬鹿らしうございますから」

此の時女將お初の面をハツタと睨んだ下村は。

「オイ女將」

ど、双腕に力を籠めて飛び掛らうとすると、慌て抱き留めた蘭子が。

「下村さん、どうぞ暫く待つて下さいまし、妾くしにも考へがございます」

ど、引留めたが、薄命の佳人蘭子には如何なる思惑があるのであらう。

「十六」

蘭子の聲は血を絞るやうであつた、蘭子の面には双眸には限り無き無念の色が漂つた。

「お母さんも下村さんも一寸お待ち下さいまし、私しは其のお金をお返し申しますから」

意外の一言を聞いたお道は。

「何んですつて蘭子……」

何んで斯んな事を云ひ出したのかと流石のお道も二の句が出ない。

「母アさん、此の証文の事を洗ひ立てを致しましたら、屹ッ度罪人が出るに極つて居ます、妾しは夫れが何よりも厭やでございますから、其のお金は女將さんの仰し

やる通り御返済申す事に致しませう」

「だつて左様するのには二百圓と云ふ金が不足では無いか」

「左様です、然し其の二百圓は妾しが稼いでお返し申しませう、斯う云ふ運命を持つて生れた妾くしは夫れに従ふより外に手段はございません」

ど、頭を下げた彼の女は恨めしうに其の証文を噴めた。

「流石に蘭子さんは、彼の時のことを覚えて居るねえ、何にも私し達は貸さぬ金を返へせと云ふのでは無いからね」

「お女將さん……」

ど、再び蒼白の面を上げた蘭子は。

「妾しは急場を救つて頂いた御恩は仇ではお返しを申しませんから御安心なさつて下さい」

此の時の蘭子には、世の冷酷に飽くまでも反抗しやうと云ふ恐ろしい決心が浮んだからである、彼れは此の証書は、桔梗家の夫妻が腹を合せて書き替へた事を看破し

た、是れを知つて殊更らに温和しく出る蘭子は、反つて柔順にして彼等の弱點を取つて押へた後ち、有無を云はせず彼等を報復をしようと思ふ決心をしたからである。

「さうすると蘭子さんは、此の先き如何する心算りなんです」

流石の下村にも、蘭子の胸中が判らないので、唯だ驚ろきの眼を睜るのみであつた。

「下村さん……」

と、男の前に泣き崩れた彼の女は。

「種々お世話になりましたが、斯うして五百圓の証書が入れてある以上は、何ん共致方ありませんから、今日は三百圓だけ返へしまして後どの二百圓を証文にして置いて下さい、妾くしは立派に貸したと云ふ金を返したら歸宅致しますから、夫れまでは貴郎もお身体を大切にすつて……」

後とは云はんとして云ふ事を得ず、蘭子は遂に咽び入つてしまつた。

「蘭子さん……」

と、面を上げた下村は。

「良く判りました、貴女の神の如き御決心を知る或る奴が心からの自信を聞き度いですが、然し今はそんな事を云つて居る場合ではありません、貴女がさう云ふお心掛けなら僕は今日お母さんと共に黙つて戻りませう、然し乍ら蘭子さん、僕にも些さか考へがありますから、數日の後ちには二百圓の金をきつと調達します」

と、腕を扼すると其の言葉の終るのを待つて居たお道は。

「信吉さん、本當に恐ろしい世の中でございますねえ」

と、お道は恨めしさうに此の不可思議なる証文をジツと眺めた。

「伯母さん、モウ其の事は仰しやるな、蘭子さんが男も及ばぬ決心を抱いて居られるのですから」

とは云ふものゝ、血氣盛りの信吉は枯槁家の女將お初の行爲が無念骨髓に達して居る、彼れは此の証文が憎むべきお初夫妻の手で書き替へられたと思ふと、今は前後の分別を忘れ。

「オイ桔梗家のお女將、君に答辯を求めめる事があるッ……」
と、叫んだ信吉は突然りお初の手首をムンズと掴んだ。

「十七」

可憐なる蘭子は、或る決心をしたので、暫し甘んじて桔梗家の犠牲になつて、二百圓と云ふ不條理な借金の爲めに再び左り褌を取らうと覺悟した、けれども眞ッ正直な下村信吉には、到底夫れを看過する事が出来ない、彼れは遂に堪忍袋の緒を切つて。

「迂奴ッ……」

と、自分の前へ女將お初を引き寄せて、蝶の如き鐵拳を振り下した。

「アレ信さん、そんな亂暴な眞似をしては不可ません」

兒玉親娘は引留めやうとし、時には既にお初の髪は信吉の爲めに驚掴みにされて膝

の前に引捉えられて居た。

「伯母さんも蘭子さんも餘り人が善いから、斯んな馬鹿らしい目に遭ふのですぞ、第一此の証文は何んです、確に不正行爲……」
と、云つて手許に力を入れ。

「是れ、眞ッ直ぐに白狀をしろッ……」

信吉は腕に力を籠めてお初をコズキ廻はしたが、斯うなつては身を捨て鉢のお初の方が反つて怒かつた。

「一体お前は何んだい、此の人達と金錢の貸借に關係の無い青二才が、良くも桔梗家のお初に手出しをしたねえ、妾しにも歴然とした亭主があるのだから此の儘では歸へさないよ」

と、云ふが早いか奥の方に向つて。

「オイ若い人は居ないかい、早く来てお呉れ、此の若造が生意氣千萬にも妾しに向つて手出しをしやがるから、早く表へ突き出してお呉れ」

信吉は尙ほも怒氣を舍んで。

「貴様のやうな剛愎非道の奴には鐵拳以外には制裁の道は無いのだ、僕の事よりも蘭子さんの身の上はごうするのだ、夫れから先きに返答をしろ」

と、息を喘ませて居ると。

「お内儀さん、何んでございます」

五六人の荒くれ男は肩を怒らして入つて来た、信吉はギョツとしたが。

「サア早く返辭しないか」

と、まだお初に迫つて居ると、女將は此の若者に何か目配をして。

「早く片を付けてお呉れよ、肝腎な用の邪魔になつてしやうが無いやね、第一妾しを斯んな目に……」

と、後れ毛を掻き上げると。

「オウ左様ですか」

一同は怪しい眼を光らして信吉を見下ろした。

「野郎、巫山戯た真似をしやがったな、一体此處を何處だと思つて居やがるのだ、サア此方へ来い」

と、引き立てやうとすると。

「貴様達は主人の命令であるからそんな真似をするのだらうが、後どの爲めにならんぞ」

若者等は信吉の言葉などには少しも耳を貸さなかつた。

「洒落ッ臭い事を云ふなッ……」

と、云ふが早いか、極力抵抗する信吉を手取り足取りにして此の座敷から擔ぎ出さうとした。

「モシ、左様亂暴をしないで下さいまし、後生ですから」

と、我れを忘れて蘭子が起ち上つた時には早や信吉は、隣室に於て四五名の荒くれ男に足蹴にされて表へ突き出される時であつた。

「信……」

跳足のまゝで土間へ駆け下りた蘭子の手を緊つかと取つた信吉が。

「蘭子さん、少しお待ちなさい、僕は直ぐに警官を呼んで来て、憎むべき桔梗家の夫婦を監獄へ打ち込んで遣りますから」と、云ふが早いか一散に駆け出した。

「十八」

此の有様に仰天した蘭子は。

「マア待つて下さい信さん……」

と、後を追はれた信吉は。

「何んで留めるのです、彼奴等は貴女を喰ひ物にしやうと薬品で証文の文字を書き替へた憎むべき奴です、夫れのみならず、僕に對して若者を使喚して暴行を働かして居るではありませんか」

軽く首肯いた蘭子はハラ／＼と涙を流して。

「其のお腹立ちは御尤千萬です、然し信さま、貴郎が妾の身を思つて下さつて、彼のお女將さんに手出しをなさつたのは真逆の場合に貴郎の御損になりますから、其處をお考へなさつて我慢をなさいまし……ね……ね……」

と、自分の爲めに桔梗家の女將お初を打ち据えた信吉が、詰らぬ非に落ちることを氣支つた。

「……………」

信吉は心が落ち付くと共に、血氣の勇に逸つて、詰らぬ事を仕出來したのを悔いたけれども今は取り返へしが付かぬからホッと溜息を吐き。

「成程、僕は馬鹿な事をしましたなア、さうすると蘭子さんは、此の先さうなさるお心算りです」

斯う云つて信吉が氣支はしさうに聞くと、蘭子は再び涙を流し。

「實に身を切られるよりも辛らうございますが、妾は甘んじて彼の人達の貸して

あると云ふ後この二百圓を稼いで返す覚悟です」

「エッ……」

ど、顔色を變へた信吉は。

「夫れは本心ですか蘭子さん……」

信吉は半信半疑の面を上げたが、蘭子は既に或る覺悟をして居るから。

「さうです、成程あの人は恐い人ですけれども、妾くしが初めて貴郎をお救ひ申さうとして頼んだ時に、快く三百圓と云ふ金を貸して呉れた恩があります、あの人のことですから、無論あの三百圓で莫大の金を儲ける積りだったのでせう、夫れが斯う云ふ事になつたのですから、懲から云へば無理ありませんから、私しは恩返へしたと思つて、後この二百圓を稼いで返して上げやうと覺悟しました」

「……………」

神の如き蘭子の心根に感動した信吉は、思はず蘭子の手を緊つかど執り。

「貴女は何んど云ふ尊いお心掛けでせう、今貴女に斯んな苦勞をさせるのも、要す

るに僕の一身上から起つたことなのです、貴女が夫れほどの覺悟をなさつたのを無理にはお留め立ては致しません、其の代り僕にも相當の考へがありますから、三四日中に上京してきつと後この二百圓を調達して送つて來ます、どうぞ夫れまでは辛らいでせうが、あの借梗家に辛抱をして居て下さい」

蘭子は嬉しき信吉の言葉を聞く。

「然し信さん、妾しの事で餘計な苦勞をなさらないで下さい、妾しは斯んな勤めをしても、婦人の操は汚すやうな眞似は致しませんから」

流石に蘭子の面は眞赤になつた、此の時二人を取り圍んだ三四名の若者が。

「オイ蘭子さん、何を愚圖く云つて居るんだ、斯んな青書生に係り合ふと、後どで酷い目に遭ふせ、お女將が待つて居るから早く歸りなせえ」

ど、手を取らんばかりに引き立てた。

「夫れでは信さん」

「蘭子さん……」

戀の二人は生木を割かれるやうにして、残り惜しき別れを告げねばならなかった、後しを振り返つた蘭子は。

「アノお母さんも直き戻りますから、少し待つて居て下さい」

と、最後の言葉を聞いた信吉は、身を八ツ裂きにされるやうな思ひがした、と同時に其の場へ化石のやうに立ちすくんでしまった。

「十九」

借便家の女將お初が悪謀を看破した下村信吉は、忍び難き侮辱を耐へた、堪へ難き苦痛を忍んだ、さうして最後に今は可憐なる蘭子を救ふには、其の筋の力を借りるより外に手段の無いことを知つた、此の上は飽くまでも是非曲直を公廷で争はうとした、けれども肝腎の蘭子が相手の心を知り乍らも、一時受けた恩を返へす爲めに泣いて悪魔の如き抱へ主の犠牲にならうと云ふのであるから、夫れを拒止する事は

出来ずに、唯だ神の如き蘭子の心に泣いた。

「アー何んとかして蘭子さんを今の社會から救ひ出さなければ、僕の立場が無くなつてしまふ」

と、後どの二百圓と云ふ金の調達に心を痛めつゝ、彼れか是れかと思案に耽つて居ると。

「信さん……」

と、背後から自分の名を呼ぶ者があるので、ハツと氣の付いた信吉が。

「誰れです」

振り返つて見ると、自分と呼んだのは、双の眼を泣き膨らした蘭子の母親お道であつた。

「オウ、伯母さん……」

「信さん……」

二人は暫し無言の儘で互に顔を見合せて居たが。

「伯母さん、萬事の様子は蘭子さんから聴きました、然かし僕も男子です、何時までも蘭子さんに斯んな辛い思ひをさせて置きませんから」
幾度か首肯いたお道は。

「察して下さい信さん……」

「良くお察し申して居ります、實に権便家の奴等は憎むべき奴ですが、何分にも蘭子さんが神様のやうな心で在らつしやるから」

「彼の娘の云ふには、相手の悪いのは判つて居るが、一時の恩があると云ふのですから……」

「夫れも委しく伺ひました、さうして愈々蘭子さんが後どの二百圓を返へす爲めに率らい勤めをなさる事になつたのですか」

「えエ左様です、此の通り今日持つて行つた三百圓の受取証を持つて來ましたから今度は彼の人達の手には乗りません……」

「左様ですか……」

と、暫く考へて居た信吉は。

「伯母さん、蘭子さんが愈々さうと決心をされて彼の家に残られた以上は、僕達は何時までも呑気に暮らして居る事は出来ませんから、直ぐに長岡へ歸りませう、僕にも今度の運動に就て些さか考へが有りますから」

「さうですなえ、彼の子もあの様に健氣な決心をして居るのですから、私し達も何時までも女々しい事を云つて居られません」

口では左り氣なく云ふものゝ、お道の胸中は張裂けるやうであつた、同じ思ひの信吉も、今一目蘭子に逢つて、自分の心を通じ度いのであるが、今は夫れも出来ないで。

「夫れでは伯母さん……」

と、振り返へり勝ちに二人は其の場を後にして、トボ／＼と停車場の方へ歩みを運んだ、すると自分の背後から一人の外國人と腕車を連ねて同じく停車場の方に急ぐ青年紳士がある、何心なく車上を仰いだ信吉が。

「オウ野口ッ……」
思はず聲を掛けたが相手の青年紳士は無言のまゝで、冷やかな一瞥を與へて行き過ぎてしまつた。

「ねえ伯母さん、野口は新潟へ来て居ますねえ、夫れに同行の外國人は確かに獨乙人ですが、何んの爲めに獨乙人なぞと一緒に歩いて居るのでせう」
と、信吉は双腕を組んで深き思ひに沈んだ。

「二十」

信吉は彼の野口賢作が、眼光爛々たる一人の外國人と停車場へ急ぐのを見送つて、暫くは小首を傾けて居たが、彼れが再び沈黙を破つて。
「あの外國人は確かに獨乙人だが、何んで野口と一緒に新潟へ来たのだらう、夫れどもあの男はガイドにてもなつたのか知ら……」

と、虫が知らずのか信吉は、野口の一身上に大なる疑ひを掛けた。

「信さん、貴郎は何をそんなに考へて居らつしやるの」

と、お道から質問を受けると我れに復つた信吉は。

「實は今腕車で停車場の方に行く野口と同行して居る獨乙人が怪しいと思つて居るのです」

「左様ですか……」

お道は別に氣にも留めなかつた、と共に信吉を促して。

「兎に角早く長岡へ歸りませう」

家を出る時には、樂しき空想を描いて居た身が、圖らずも再び最愛の娘蘭子と別れて來たのであるから、お道は悄然として頭を垂れた。

「左様ですなア、早く戻りませう、僕も何んだか不愉快で堪らんのですから、自宅へ歸つて頭を休ませう」
斯う云つてホツと溜息を吐いた信吉は言葉を重ねて。

「夫れにしても蘭子さんは本當に尊いお心掛けです、僕は蘭子さんの決心を聴くと思はず憎むべき倍根家夫妻に對して決闘を申し込まうかと思つた位ですよ、伯母さん……」

と、信吉は再び無念の齒噛みをした。

「信さんばかりではありません、私も口惜しくてく仕様が無いですが、あの娘があんな様な決心をしたものですから……」

と、お道は再び口惜し涙に咽んだ。

「眞ッ度くです、僕も心外千萬ですが、何にしろ肝腎の蘭子さんがあんな様に決心されたのですから」

信吉も詮方ないので斯う言つて頭を上げた、さうして再びお道に向つて。

「然し善因善果ですから、追つ付け今日の悲しい日を笑つて暮らす時が来るでせうから、餘り氣を落さずに居て下さいまし」

「斯うなつては貴郎一人を彼の子もお便りにして居るのですから、何分お頼み申し

ます」

「承知しました、僕も男一疋です、蘭子さんが今日の苦しい境遇は屹ッ度僕が救ひ出しますから」

彼れは東京へ出たら、向島附近に潜伏して居る李銳唸將軍に事情を打ち明け、將軍の涙に訴へて蘭子を救ふ淨財を得やうと覺悟したのであつた。

「夫れでは行きませう」

「え、早く行きませう」

「徳平さんも嘸ぞ驚くでせうねえ」

と、云つてお道はトポトと信吉の後に従つた。

「父は驚くよりも理不盡なる桔梗家の夫妻に對してどんなに怒るでせう」

と、信吉は父の態度を眼に見る如くに答へた、さうして停車場へ着くと、一二等待合室に居た野口賢作と怪しい獨乙人は、信吉の姿を認めると慌て、構外へ出て行つてしまつた。

「どうも彼奴等の舉動は不思議だ」

と、二人に對して益々疑問を抱いた信吉は、旋がて發車する上り列車の客となつて我が家へ戻つた、二人の姿を門口に迎へた徳平翁は。

「オウ、お歸りかな……」

と、我子信吉の方へ眼を移し。

「あの東京から返信料付きの至急電報が着いて居るよ」
と、不安の面を上げて一通の電報を信吉に渡した。

「二十一」

信吉は父の徳平翁から受取つた電報を披いて暫く黙讀して居たが。

「父うさん、此電報は何時頃來ました」
徳平翁は何氣無く。

「今朝お前が出掛けると直ぐに届いたのだ、定召直ぐに返辭を出さなければならんとは思つたが、何にしろお前が留守だから預つて置いたのだ」

と云つて、初めて蘭子さんが居らぬのに氣の付いた徳平翁は。

「あの蘭子さんの姿が見えんが、どうかされたのかね」

「ハイ……」

と、涙の面を上げたお道は。

「あの娘は當分の問歸る事が出来ないのてございます」

「何んですツて、蘭子さんは歸る事が出来ない、一体夫れはどうしたのです、今朝出掛ける時には、借りた金を返へして自由の身体にする約束でしたか」

と、呆氣に取られて居ると、此の時面を上げた信吉が。

「父うさん、實に意外千萬のことが出来たのです、實は蘭子さんの借りた金に就て恐るべき企てがあつて、遂に其の犠牲になられました」

「何に、恐ろしい企て……一体どう云ふ事なのだね」

と、徳平翁が一膝乗り出すと。

「實は斯う云ふ譯けなのです」

ありし事どもを落ちも無く物語ると、忽ち眉を上げた徳平翁は、我が子信吉の面をハツタと睨み。

「馬鹿ッ……そんな馬鹿氣切つた事が大正の新時代にあるか、第一貴様は何んの爲めにお道殿や蘭子さんと一緒に新潟へ行つたのだ、直ぐと引き返へして警官を桔梗家へ連れ込み、善悪を訊した上で蘭子さんを連れ戻りなさい」

と、頗る不機嫌である、徐ろに面を上げた信吉は。

「其の事は父うさまが仰しやるまでも無く、僕は警官を呼んで来やうとしたのですが、何分にも肝腎の蘭子さんが先方の云ふ通りになつてしまつたのですから、如何ともする事が出来ません」

信吉も残念さうに双腕を扼した、すると徳平翁は。

「蘭子さんが甘んじて犠牲たるの覺悟をされた以上は如何ともする事が出来ないが

夫れにしても貴様は、此の儘、オメーと蘭子さんの稼ぐのを傍觀して居る積りか」

其の語氣はり察しても信吉の返答次第で徳平翁は、自己の信する處に向つて蘭子を救済すべき手段を講じやうとするらしい。

「實は僕にも相當の考へがありますから、近き將來に蘭子さんを落籍させる自信があります」

斯くと聞いて破顔微笑した徳平翁は。

「夫れを聞いて俺しも安心した、さうして貴様は東京へ出る積りだらうな」

「左様です……」

と、キツパリ返辭をした信吉は。

「實は李將軍から、至急上京せよと云ふ電報が来て居りますから、是れから直に出發しやうと思つて居ます」

「おう左様か、夫れなら少しも早く行つた方が良いだらう」

此の時心配さうな面を上げた信吉は。

「此の電報で見ると、餘程急いで居られるやうですが、僕が返電せぬので將軍を始め笹田さんも心配をして居られるでせう」

と、留守に到着した一通の電報を父の前へ差し出した。

「成程、此の電報は餘程急な用事らしいな、兎に角直ぐに上京する返電を打つて、今夜の夜行列車で上京しなさい」

「ハイ、左様云ふ事に致しますせう」

親子の相談は忽ち一決した、お道は今引留る事が出来ないもので、信吉に手傳つて其行李を纏めた、さうして信吉は大なる希望を抱いて上京した。

「二十二」

信吉が、慕かき故郷長岡を後にして、三度び東都の空へ志した時には、今ま

で別に一戸を構へて居た兒玉お道は、信吉の實父徳平翁の家へ寄留する事となつた。

「夫れでは伯母さん、お身体を大切にすつて下さい、僕も當分は歸られないと思ひますから、父の身の上は何分宜しく願ひ申します」

と、自分を停車場まで送つたお道に向つて挨拶をする。

「安心して行らつしやいませ、斯うして私もお父さんと御一緒に居るやうになつた以上は、此方の事には少しも御心配をなさいますな」

此の時徳平翁も我が子に向つて。

「信吉、故國の事は少しも心配をしなくても可いから、早く將軍の許へ行つて御恩返へしをなさい」

「ハイ……」

と、信吉は頭を下げた後ち。

「夫れから先刻お話し申した通り、私は屹度、將軍の涙に訴へて二百圓の金を調

達して送りますから、お受取りになつたら、直ぐに蘭子さんをあの社會から救ひ出して下さいまし」

「ウム、其の事も承知した、夫れから血氣の勇に誇つて輕舉をしては不可んぞ、要するに自重せんければ不可んぞ」

「ハイ……」

ど、親子は飽かぬ別れを惜んで居ると、艦がて列車への乗り込み時間が来たので、信吉は父と最後の握手を交はし。

「夫れでは御機嫌好う……」

「貴様も達者で暮らせよ」

一抹の煤煙を残した列車は、或る希望を抱く信吉を乗せて南の方へ影を没してしまつた。

「悴の奴も、今度のことでは餘程心を勞して居りますから、三四日の中には何んとか吉報を寄せるでせう」

ど、徳平翁はお道を顧みること。

「本當に飛んだお世話になります、世の中には他人の娘を賣り物にして不正の金を儲けやうとする人があるのに、信吉さんは夫れとは反對に、私し達の爲めに之れから先き御苦勞をなさるかと思へば、眞つ度く勿体ない位でございます」

ど、互に最愛なる我が子に別れた淋しさを感じつゝ徳平翁の家に戻つた、此方の信吉は、暗を走る列車の中に身を横へて、將來の事を空想しつゝ、若き血を躍らせて居た、さうして彼れの胸中には、南清の一角にあつて銃砲彈の雨と注ぐ中を馳驅して一隊の健兒を指揮して居た。

「兎に角、不幸にして失敗に終るとも、男子快心の事業は之れに増さる事はあるまい……」

ど、夫れから夫れへと空想を馳せつゝ、淡き眠りに就いたが、眼の覺めた時には、東の空が既に白み渡つて、身は武藏平野の一角に運び來られて居た。

「おう馬鹿に寝過したなア」

ど、窓を開けると、朝の筑波山の東の空に聳へて居た。

「將軍は向島に潜伏して居ると云ふが、如何なる用事が出来たのだらう」

前の日に受取つた電文が頗る簡單であるため、自分を呼び寄せる將軍が、如何なる使命を與へるかど大なる疑問を抱いて居た、さうして上野へ着いた信吉は直ぐと腕車を雇つて。

「本郷の森川町まで行つて呉れッ」

ど、李將軍や劉鳴起の笹田重助が假りの宿として居た潜龍館を訪れると、意外千萬にも下宿屋は表から釘付けにされて、一家は何處へか退轉して居る。

「オヤッ……」

流石の信吉も餘りの事に呆氣に取られて居ると。

「おい〜、君は此の家へ用があつて来たのかね」

ど、聲を掛けた一人の男があつた、さうして此の男は迂散臭き眼を以て信吉の身の廻りを注視した。

「二十三」

訪れた李將軍の下宿屋には見も知らぬ人が住んで居るので、流石の信吉も暫し呆然として家の前に佇立んで居ると、不意に自分の名を呼ぶ男があるので。

「あの僕ですか……」

ど、振り返ると、件の男はつか〜と信吉の前に來たり。

「君は李將軍を訪れたのでは無いですか」

扮装に似合ぬ丁寧の言葉に信吉は、此の男は果して何者であらうかと思ひ惑つて居ると。

「君ッ、不意に斯んな事を聞いたので驚いたのでせうが、實は僕も李將軍を尋ねて居るのですが、將軍は昨夜から一味の人々と共に此の東京を引上げたらしいのです。僕は將軍の潜伏せられた向島の家や九州の近山さんが宿つて居た築地の有明館も尋

ねたのですが、矢張り將軍と東京を出發したらしいのです」
「ア、左様ですか」

ど、返辭はするものゝ、此の男が其の言葉の通り、李將軍を尋ねて居るのか、或は革命黨員を附け覗つて居る刺客の一味ではあるまいかと、信吉は少しも油斷が無いするゝ其の男も夫れに氣が付いたと見え。

「君ッ……初對面の僕が斯んな事を云ふと不思議に思ふだらうが、實は僕も南清革命黨の一人なんだよ、君も定召しさうなんだらう」
ど、何處までも馴れ／＼しく云つて。

「疑ふなら是れを見て呉れ給へ」
ど、懷中から取り出した一通の電報は、前日に自分が受取つたのと同じの文章であつた。

「ア、左様でしたか」
漸く夫れと知つた信吉は。

「お察しの通り、私は李將軍から多大の御同情を蒙りましたばかりか、今では黨員の末席を汚して居るのですが、仰しやる通り、將軍は東京を出發されたのでせうか」

「さうです、實は僕も將軍に身を捧げて居るのですが、昨日電報で呼び寄せられたれど、少し家庭の都合で一日遅れた爲將軍に逢ふことが出来なかつたのは實に残念千萬です、僕は將軍や同志の先輩から、頼み難ない男と思はれるのが實に残念です」

ど、此の男は斯う云つて地團駄を踏んで居る。

「あゝ左様ですか、僕も貴郎と同様に、閣下にお目に掛れなければ同志の皆さんに顔向けが無いのです」

ど、信吉はさも無念さうに双の拳を握つた、すると此の男は。

「さうして君は將軍の行きさうな處知りませんか」

「さア私も貴郎のお言葉を伺つて當惑して居るのです」

「さうですか……」

と、此の男は暫く考へて居たが。

「君は何處か宿所があるのですか」

「將軍が出發されたとする、私しは當分下谷の越後屋と云ふ木賃宿に泊つて、將軍の動靜を調べやうと思ひます」

「あゝ左様ですか、僕は中島定之助と云ふ者で、千駄ヶ谷の錦花園といふ植木屋が伯父の家ですから其處に泊つて居ますが、双方で早く知つた方が通知する事にしませう」

「ではお互に先きに知つた者が知らし合ふ事にしませう」

と、二人は力無く、潜龍館の前で右と左りに別れたが、途方に暮れた信吉は、止むを得ず萬年町の木賃宿越後屋へ歸つて、其の翌日から心當りの家を探ね廻つたが李將軍を始め同志の消息は少しも知る事が出来ない。

「困つた事が出来たなア、今日は警視廳へ行て聽いて見やう」

と、朝早くから宿を出やうとする時。

「オイ、下村君、李將軍の消息が知れましたぜ……」

と、同志と稱する中島定之助が息を切つて入つて來た。

「二十四」

中華民國に於ける憂國の志士、李銳唸將軍から東京へ呼び寄せられた下村信吉は、僅かの時間に遅れた爲め、生命まで捧げて居る將軍が、何處へか出發した後となつたので、信吉は其の後市内に於ける心當りを尋ねて居たが、今日も今日とて木賃宿越後屋を出やうとする同志の一人たる中島と呼ぶ青年が、將軍の消息が知れたと云つて訪れて來たので胸を躍らせた信吉は。

「あッ左様ですか……」

と、歡喜に溢るゝ面を上げ。

「此處ではお話しが出来ませんから、兎に角二階までお上り下さいまし」

「さうですか、夫れでは失敬します」

と、中島は快活に云つて二階へ上ると信吉は軽く頭を下げ。

「斯んな穢さ苦るしい處で失敬ですが、どうか勘辨して下さい」

「イヤ……」

と、其場に座つた中島は。

「下村さん、將軍はモウ日本には居られませんせ」

「えッ……何處へ行かれたのです」

餘りの事に呆氣に取られて居る中島は残念さうに。

「下村さん、將軍は我れ／＼の着京を待つて居られた處、我れ／＼の着京が遅いの
で出發されてしまつたさうです」

「あゝ左様でしたか」

と、長い／＼嘆聲を洩した信吉は。

「さうして何處へ行かれたのでせう」

「さア……」

と、四邊りの様子に氣を配つた中島は聲を潜め乍ら。

「將軍は表面こそ佛蘭面の巴里附近に潜伏して居るやうに社會を瞞着して居るので
すが、事實は支那の芝罘附近に行かれたやうです」

「何に芝罘……」

と、小首を傾けた信吉は。

「さうすると我が黨員の行動は俄かに變更したのでせうか」

「何か判りませんが、將軍等の同志は今や埃塞兩國の國際が餘程切迫して、一歩間
違ふと歐洲の天地は戦亂の巷となりさうですから、將來を見越して何か新しい計
畫を立てられたやうです」

「新しい計畫……」

信吉は再び沈黙の人となつた、さうして稍や暫くは腕を拱いて考へて居たが、突如

頭を上げて。

「夫れでは將軍は山東省へ紛れ込む心算では無いでせうか」
「しッ……」

と、制した中島は突然り起つて部屋の内外を改めた後ち。

「どうも左様らしいのです、歐洲の形勢は今日の處はごうしても大亂が起るに違ひないでせう、さうなつた曉には獨乙が日頃の野心を満足しやうと、あらゆる手段を用ゐるでせうから、従つて膠州灣の要塞もいつ何時砲火を浴びる慘劇を呈するか判らないのです、其の間にあつて將軍等の同志……」

と、中島は信吉の耳に口を寄せて何事かを囁くと、忽ちの裡に希望の色が輝いた信吉は。

「成程、面白い事業ですな、一面に於ては我國に對しても大なる功を樹てる事が出來ますなア」

と、活き／＼した面を上げ。

「夫れで中島さん、貴郎は將軍の後を追つて渡清する心算りですか」

「え、是れから直ぐに行く心算りですから、實は君の處へ暇乞に來たのです」
「あゝ左様ですか」

と、口を噤ぐんだ信吉は、自分は將軍の涙に訴へて二百圓と云ふ金を融通を乞はうと上京したのであるから、此の一言を聴くと。

「何んと云ふ情け無い事であらう」
と、心の中に熱涙を流した。

「二十五」

同忠の一人たる中島定之助が、東京を出發したる李將軍一行の後を追ふと聞いた下村信吉は、自分も同行したかつたが、今は夫れさへ出來ぬ身の上となつて居るので。

「中島さん、誠に残念ですが、僕は最早懐中無一物となつて居るので、今日明日の中に自活の方法を執らんければならぬのですから、到底御同行が出来ない境遇にあるのです」

と、耻かしさうに面を上げ。

「然し、僕も將軍から受けた恩は忘れませんから、如何なる勞働をしても、旅費を拵らへて行きますから、將軍にお逢ひでしたら、僕の事をお傳へなさつて下さい……」

氣の毒さうに信吉の語るのを聞いて居た中島は。

「實に御同情をします、僕の手で金の融通さへ付けば御一緒に行くのですが、何しろ僕も手薄ですから」

「御厚意は有難く思つて居ます、斯う云ふ事になるも皆な運命なんですから、僕は別段悔みはしません、只將軍から、頼み難き男と思はれるのが残念です」

「君の眞意は將軍に傳へますよ、然し僕にしても雲を掴むやうな旅行なので、何から

果して李將軍に會へるかどうかは頗る疑問なんです」

と、云つて中島は歸り支度くをなし。

「夫れでは下村君、將軍に會ひさへすれば何んとかして旅費を送るやうにしますから、君は健在で居て呉れ給へ、僕は今夜下の關直行で出掛けますから」

「さうですか、お急ぎの場合ですから別段お留め立ては致しませんが、貴郎も達者で消光して下さい、夫れから僕は此の家を當分動きませんから、御便りを下さるなら此の越後屋へ宛てて下さいまし」

「畏りました、夫れでは君ッ……」

と、堅い握手を交換した後に見世口まで信吉に送り出された中島は、氣の毒さうにして出て行つてしまつた。

「あゝ僕位不仕合な者は無いなア」

と、心の中に呟いた信吉は、ヂツと中島の後ろ姿を見送つて居たが、其の姿が町の角から消えると悄然として自分の部屋へ戻つて來た。

「どうしたもんだらうな、今更ら故國へ歸る事は出来ないし、頼みにした將軍は、既に東京を去つて居ないから、到底蘭子さんを急に救ふ事は出来無い……」

と、身を悶えた信吉は、男泣きに泣き崩れて居たが。

「さうだ、徒らに悲観すべき時では無い、何とかして自活の道を立てると共に、僅かの金でも貯金して、一日も早く蘭子さんを自由の身体にしやう、夫れには今までの様に夕刊賣りばかりをして居ては到底駄目だから、牛乳の配達もしやう、時間があつたら人力車も曳かう」

と、自活の方法を立てると彼れは、一行書いては涙を流し、一字書いては溜息を吐きつゝ、長岡に居る實父の許へ實状を報告する書信を認め。

「嗚ぞ父うさんや伯母さんも落膽されるであらうが斯うした運命を持って生れて來たのだから、如何ともする事が出来ない、唯だ此の上は神の護りを祈るより外に無いのだ」

斯う云つて起ら上つた彼れは、書き上げた書面を投函して來ると、越後屋の主人に

現在の事情を打ち明け。

「ねえ旦那、今夜から腕車を曳かうと思ひますから、一つ力を貸して下さい」

頼まれては後ごに退かぬ主人の太田伊之助は。

「宜ろしい、承知しました、實にお氣の毒だが艱難は汝を玉にするとか云ふ格言もありませんから、一つ奮發して遣つて御覽なさい……」

と、親切なる主人は直ちに附近から腕車から法被まで借りて來て呉れた、さうして其の晩から信吉は上野廣小路の停留場で乗客を待つ身のとなつてしまつた、期する事の出來ぬ運命の二字は向後の信吉や蘭子を如何に弄ぶであらうか。

「二十六」

箱根山籠に乗る人擔ぐ人其の又た草鞋を作る人……世の中の事は上を見れば限りが無いが、下を見れば亦た限りが無い、不遇薄命の青年下村信吉は今や自己の運命を

開拓すると共に自分の爲めに、身を新潟の花柳界に投じた未來の愛妻、兒玉蘭子を救ふ第一の手段として腕車曳きに迄成り下つてしまつたが、心は常に紳士を以て自任して居た。

「お安く参りますが如何でございます、旦那御都合は如何です」

最初はどうしても通行人に乗車を勧めることが出来なかつたが、斯くてはならじと氣を勵げました彼れは、一度が二度、二度が三度と馴れるに従つて平氣で是れを口外するやうになつた。

「あゝ情け無い身の上だ」

と、何度涙を絞つたか知れぬが、其の度び毎に氣を取り直して轆轤を緊つかと握ざり。

「旦那如何様で……」

斯くして最初の晩は團子坂まで法外の安い直段で客を乗せ、僅か白銅二枚を握つてへト〜に疲れた身体を越後屋に運び入れた、すると彼れの戻りを待つて居た主人

が。

「どうだつたね下村さん……」
丁寧な頭を下げた彼れは。

「有難うございます、お蔭で十錢だけ稼いで来ました」

綿のやうに疲れて戻つて来た彼れは、今夜の收入から八錢の賃借料と四錢の法被借り賃を出す、差引二錢の損となつて、儲けは身體の疲れのみであつた。

「そんな事では騎目だ、明日からモウ少し稼ぐやうにしなければ眞箇うに骨折り損の草臥儲けだ、アハ、ハ、ハ」

と、何氣無く笑つて居たが、親切なる主人は其の夜の中に古着見世へ行つて法被を求めて来て。

「失禮だが下村さん、是れは私しが貴郎へ差し上げる、夫れから都合に依つたら傳も俺しが一臺買つて貴郎へ貸すから、毎日五錢宛お返しなさい、さうして其の車代丈の金が入ればお前さんの車として後とは金を入れなくても善いから、さうしたら

可いでせう」

信吉は幾く度びか感謝の涙を流し。

「御主人、貴郎の御厚意は一生忘れは致しません」

「さう云つて呉れると、私も本當に嬉しいよ、兎に角氣を腐さらさずにお稽ぎなさい」

「はい……」

三四日経過と新調の腕車が出来た、主人が好意で鑑札も受けた、直段の事は安い高の頓着も無く客の求めに應じるので、開業一週間の後には毎夜一圓内外の金を握つて戻るやうになつた。

「此の分なら一年と経過の中に蘭子さんを自由の体にする事が出来る」

信吉は勵みが出て来たが、少時も忘れられぬは其後香として消息の知れぬ李將軍の身の上であつた、斯う云ふやうに相當の収入があるやうになると、彼れは王城法學校の入學試験を受けた處首尾好くも入學する事が出来たので、彼れは日中は學校へ

通つて、夜は轆棒を握るの身となつてしまつた、夏期休業もモウ七八日の後に迫つて居る、夏の真盛りの夜を、今夜も上野の廣小路に轆棒を下ろした信吉は。

「今日送つた二十圓の金は少額ではあるが、蘭子さんの借金の中へ入れて呉れたであらうか」

と、自分が流した汗の結晶とも云ふべき今日送つた二十圓の金に對して自問目答をして居ると。

「オイ俵屋……吉原まで急いで遣つて呉れ」

と、二人連の客があつた。

「ハイ……」

急いで仲間の一人を呼んで来た信吉は客に向つて。

「どうぞお召しなすつて下さい」

二人の客は應揚に車上の客となつた、不圖氣が付くと、仲間の乗せた客はいつぞや新海で野口賢作と同行して居た獨乙人であつた。

「此の獨乙人はどうも怪しいぞ」
斯う氣の付いた信吉の面は忽ち異様に輝いたが、信吉の乗せた客も頻りと小首を傾けて信吉の横顔を車上から注視して居た。

「二十七」

車上の客が自分を注意して居るとは夢にも知らぬ信吉は、一生懸命に駆け出して上野の屏風坂の下まで來ると。

「おい車屋、一寸待つて呉れ……」
と、呼び留められた信吉が。

「はい……」
と、轆棒を握つて立ち留ると。

「吉原へ行つたら、歸るまで待つて居て呉れ、旦那は泊つても、俺は歸るのだから」

ら」

斯う云はれると信吉は、此の客は前の獨乙人に雇はれて居る通譯と思つたので、心の中に大に喜び。

「ハイ、畏りましてございます」

と、意勢好く返辭をした彼は、自分の客が果して自分の想像した通り、此の怪しい獨乙人の通譯であるならば、幸ひであるから、其の旅宿を聴かうと思つたので、何氣無き風を装ひ。

「旦那、前の俵に乗つて居らつしやる旦那は、何處の御方でございます」

「あの外國人は獨乙の貿易商だよ」

「……ア、左様でございますか」

信吉は忽ち思ひ當る事があつた、其の胸中には愈々此の獨乙人は怪しいと云ふ疑問が起つて來たが、餘り追及すると反つて妙に思はれるので、其の儘黙つて走つて行くど、日本堤から五十軒へ曲ると。

「オイ仲之町の松三樹へ卸して呉れ」

「ハイ……」

信吉は引手茶屋松三樹で聴いたら、大概の様子は判るであらうと、心の中に大に喜びつゝ。

「お客様ツ……」

と、轆棒を突くと、二人の姿を認めた帳場の中の女將は。

「オヤ入らつしやいまし、暫らくお姿をお見せにならないものですから花魁が大層心配して居らつしやいますよ」

と、揉み手をしながら見世先きへ出て來ると。

「旨々云つて居るせお女將……」

と、云ひ乍ら、素早く二階へ上つてしまつた、信吉は此の時外國人の面を穴の明く程覗いて見ると、確かに新潟で逢つた外國人であつた。

「あの若衆さん、お前さんの旦那は、大引前にお歸りになるから待つて居て下さい

よ」

「有難うございます」

信吉は軽く頭を下げて額の汗を拭いて居ると、馴染らしい藝妓が三四名呼ばれて大陽氣に騒ぎはじめた。

「一体僕の客は通譯なのかしら」

と、不審の眉を寄せて居ると、多くの女中に案内された獨乙人と信吉の乗せた客は酔歩踉蹌として、馴染の妓樓へ送られて行つた、後で見送つた信吉は、女將に向つて。

「お内儀さん、只今のお客様は常にお入來になるお客様ですか」

「ア、左様だよ……」

チロリと信吉の面を噴めた女將は。

「お前さん夫れを聞いて如何する心算りなの……？」

「別段どうと云ふ用事は無いのですが、歸りが餘り遠くは無いかと思つて伺つたの

でございませう」

「アラ左様なの、お宅はさう遠い處では無いわ」

「さうですか……」

と、信吉が軽く首肯いた時、バナマ帽子を眉深に被つた信吉の客は、急ぎ足で戻り來り。

「お女將……自宅から電話で急用が出来たと知らして來たから、バーゲンさんを殘して歸るせ、ごうか後とは何分頼むせ……」

と、見世口で云ひ置いて信吉の俵へヒラリと飛び乗り。

「オイ、箕輪まで急いで行けッ……」

横柄に命じた此の男が、彼の蛇籠源太とは信吉は少しも知らなかつた。

「二十八」

バナマ帽子を眉深に被ぶつて居るので、自分の乗せて居る客が、彼の恐るべき兇漢蛇籠の源太であるとは夢にも知らぬ信吉が、云はるゝまゝに箕輪まで曳いて行くこと車上の源太は。

「オイ車屋さん、疲れて居る處を氣の毒だが、神田の駿河臺まで行つて呉れないか……」

箕輪から神田の駿河臺と云へば、さう近い道程では無い、信吉は妙に思つて客に向ひ。

「旦那様、夫れでは此方の御用はお達しにならないのでございませうか」

「ウム、急に考へ直したのだ、向ふへ着けば酒代を出すから、其の積りで急いで行つて呉れ」

「ハイ……」

心の中では、此の客の行く處まで行つて後とを警戒したなら、彼の獨乙人の様子も判るであらうと、信吉は双脚に力を籠めて、夜の都大路を神田へ急いだ。さうして

駿河臺のニコライ會堂の下まで來ると、日華洋行と金看板の出た家の前で。

「オイ、此處で降して呉れ……」

「ハイ……」

と、信吉は轆棒を下して額の汗を拭き乍ら。

「ごうも難有うございます」

軽く頭を下げる。件の客は。

「今錢を持たして來るから、一寸待つて居て呉れ……」

「ハイ……」

と、家の者を呼び出して中へ入つて行く、此の客を見送つた信吉が。

「日華洋行……」

自分が彼の李將軍に私淑して居るばかりか、革命黨に連絡のある一人として他日大なる活動をしやうと、心の内に期して居る信吉は、此の看板を眺めると小首を傾むけ。

「ごうも此の家も怪しいぞ、今乗せて來た客は、彼の獨乙人の通譯としたら此の家と獨乙人とはどんな關係があるのだらう、ヒョツとしたら此の家が恐ろしい刺客の隠れ家では無いかしら」

と、心の中に自問自答して。

「夫れにしても彼の獨乙人と野口の奴とは、如何な關係が有るのだらう」

と、彼れは一生懸命になつて、此の疑問を解決しやうと、頻りに首を傾むけて居る。

「オイ車屋さん、一寸此方へ入つて呉れないか、旦那が酒代を上げるさうだから……」

丁寧に頭を下げた信吉は。

「ごうも恐れ入ります」

と、何の氣無しに入口を跨いで家の中へ入ると。

「御苦勞だったねえ、何んだか旦那が大變お前に氣の毒な思ひをさせたから、車代

の外に是れ丈け酒代を遣つて呉れど仰しやつたせ」

ど、年の頃四十餘りの男が出て来て、信吉へ一圓の紙幣を渡さうとした。

「誠に恐れ入ります、斯んなに頂戴致すことは無いのです」

ど、辭退すると、此男は信吉に向つて。

「さう遠慮するを事は無い、遣ると云ふのだから受取りなさい」

「左様でございますか、夫れでは仰せに従ひまして頂戴致します」

ど、信吉が右の手を出すと、其の手へ金を渡す振りをした此の男は、矢庭に信吉の手首を掴み。

「オイ、一寸此方へ上れッ……」

力任せに手首を握られた信吉は。

「御戯談をなすつては不可ません」

彼れはまだ氣が付かなかつた、すると此男は、無言の儘で信吉をズル／＼と引き上げ。

「オイ表の入口へ錠を掛けて仕舞へ」

ど、若い事務員らしい男へ命令した、と同時に信吉に向つて。

「野郎、手前に少し聴き度へことがあるのだから此方へ来い……」

ど、奥の方へ連れて行かうとする。

「二十九」

不意に自分を座敷の中へ引き摺り入れやうとしたのであるから、流石の信吉も不意を喰つて大に驚き。

「何をなさるのです」

ど、抵抗しやうとすると此の男はセムラ笑つて。

「愚圖／＼吐かすと撃ッ放すぞ……」

斯う云つて眼の前へ突き付けたのは六連發の短銃であつた。

「アッ……」

思はず大きな聲を出した信吉は、何んの爲めに斯んな真似をされるのか、少しも其の理由が判らなかつた、自分では此の日華洋行と云ふ家は、何んもなく怪しいとは思つたが、彼れ等に斯る理不盡の行爲をされる覺えは露程も無い。

「モシ、何かお間違ひではございませんか、私しくは御當家の旦那を吉原からお乗せ申して來た車夫ですせ」

相手に恐るべき兇器があるから、下手に抵抗をして、負傷でもしては一大事と信吉は、彼れの後に従ふと。

「何んでも宜いから此方へ來い、貴様に少し聴き度い事があるんだ」

「へエ……」

夢に夢見る心地で其の男に伴はれて奥の方へ行くと、奥の方にある六疊の座敷に入つた、さうすると其の男は。

「此處で溫和しくして居ろッ……」

と、云つて手を放した、信吉は唯だ呆氣に取られて其處へヒタリと座ると。

「おい、大きな聲を出したり此處から逃げやうとすると生命が無いぞ」

斯う云い置いて座敷の外へ出たかと思ふと、忽ちビンと入口へ銃を卸したやうな音がした。

「おや……」

と、全身に冷水を浴せられたやうな心地のした信吉はソツと立ち上つて入口の襖を明けやうとすると、外から銃が卸してあると見えて少しも動かない。

「アッ……」

と、絶叫した信吉は忽ち顔色を變へて再び双腕に力を籠めて襖を明けやうとしたが逆も一人や二人の力では如何ともする事が出来ない。

「然し、多寡が唐紙である、踏み破つても蹴破つても出やうと思へば屹つと出られる」

斯う心の中で首肯いた信吉が、襖の面へ手を當てて調べて見ると、驚くべし此の襖

は鐵格子で作つてあるらしい。

「コ……是れは不可ん……」

信吉は斯う叫んだと共に、何の爲めに自分を斯んな處へ幽閉するのか少しも解する事が出来なかつた。

「此の家は怪しいには違ひないが、人間違ひで斯んな處へ幽閉されるのは困つたなア……」

と、心の中で獨語した信吉が、座敷の真中まで戻つて來ると。

「ハムム、夫れは面白い、下村の奴を釣つて來たとは造化の妙も亦た極はまれりだ、實に事實は小説よりも奇だねえ、彼奴と新潟で會つた時は、妙に僕等を注意して居たが、東京へ來て車夫に化けて居るとは少しも氣が付かなかつたが、ヒヨツとしたら彼奴は探偵になつて居るかも知れないよ君ツ……」

と、愉快さうに大きな聲を出して語合ふのは確に野口賢作に違ひない。

「ヤツ……野口……」

信吉は夫れと知つて思はず其の場に反り返つた。

「夫れにしても此處へ乗せて來た奴も、僕を知つて居るらしいが、彼奴は一体何者だらう……」

今は餘り意外の出來事に、恐ろしさも忘れて信吉は腕を組んで考へはじめた、すると野口の相手になつて居る男が。

「兎に角あの野郎には俺しも怨みがあるから、此の儘生かして置くことは出來ませんや」

此の一言を聞いた信吉は。

「ヤツ……」

と、絶叫した、と同時に今まで狭き室内を照らして居た電燈は俄に消えて、四邊りは眞の闇と化してしまつた。

座敷牢の外の談話を聞いた下村信吉は、足摺りをして口惜しがった、けれども斯る處へ幽閉されてしまった以上は如何する事も出来ない。

「野口の奴は僕と知つて、今にも危害を加へやうとするに違ひ無い、今夜吉原から此家まで乗せて來た奴は一体何者だらう……」

信吉は身の危急も忘れて小首を傾げて居ると、外の談話はハタと絶えてしまった、と同時に奥の方で五六名の人々が、ヒソ／＼物語る聲が手に取るやうに聞える。

「此處は革命黨員を附け覗ふ刺客の本部に違ひない……」
斯う氣が付くと自分が前途の運命も臆氣なぶら察する事が出来る。

「世の中に僕位不運な者はあらうかしら、東京へ來れば李將軍は出發された後さだし、宿の主人の好意に依つて漸く糊口の資を得たと思へば、今度は斯んな處に幽閉されるとは、何んと云ふ情ない事だらう」

日頃氣の勝つて居る信吉も、ハラ／＼と口惜し涙を流し。

「今頃蘭子さんはどうして居られるだらう、父うさんや、伯母さんは御無事だらう」

か

不覺の涙に暮れた信吉は、黒闇々たる室内に身を悶えて居たが。

「斯う云ふ事になるのも定つた運命なんだらう、徒らに煩悶して居ても仕様が無いから、何んとかして彼奴達を旨く胡摩化して、此室を出るやうにしやう」

と、斯う決心すると、彼れは殊更らに冷靜を装ひ暗い座敷の中央でグウ／＼眠つてしまつた、が如何に覺悟をしたとて惡漢等の本心が判らないから眠らうとするも眠る事は出来ない。

「飛んで火に入る夏の虫さ……」

と、云ふ聲が座敷の外で聞える、と今までウト／＼して居た信吉は俄破と刎ね起きた、さうして邊りに氣を付けて見ると、どうやら夜が明けたと見えて表の街路には物賣りの聲が高い。

「あの昨夜の野郎に今朝は何か喰はせてやりますか」

「なに、何にも喰はせなくても可いよ」

と、云つて片手に短銃を持つて襖を細目に開けた一人の男がある。

「おい下村、眼が覺めたか」

と、聲を掛けられた信吉は。

「貴様達は人間違ひをして斯んな處へ僕を入れてどうする積りだ」

「何に、人間違ひ……？人間違ひをした者が貴様を下村と呼ぶか、馬鹿ッ」

憎むべき悪漢は斯う一喝して。

「昨夜は遠い處を御苦勞だったな」

と、冷やかな笑みを浮べ。

「貴様は此の俺れを見忘れたか」

斯う云はれると信吉は小首を傾げ。

「貴様のやうな奴は知らん……」

と、云つて頭を垂れると。

「おい下村、妙な縁で貴様の親爺にも二百圓と云ふ旅費を貰つたが、俺れは下谷警

察の留置場を破つた時には種々と貴様に厄介を掛けたつげなア」

ハッと驚いた信吉は思はずデリ〜と詰め寄つて。

「夫れでは貴様は……」

と、其の面上を熱視し。

「おう、貴様は……あの暴風雨の晩を利用して、留置場を破つた堀越源太だなッ……」

……

「漸つと判つたのか、察しの通り蛇籠の源太だ、あの時の禮をしたばかりに此處へ連れて來たのだから温和しくして居ろ……」

萬一にも信吉が飛び掛るやうなことでもあつたら、一撃を加へやうと銃先きを信吉の胸先きに向け。

「まア氣長に遊んで居ろ……」

と、凄い笑みを洩した時。

「ねえ、何んば何んでも飯だけは喰はせて遣りませう」

ど、傍らから源太に勸める男がある。
 「そんな餘計な真似をしなくても可い、打つ棄つて置けば腹が空いて其の儘死んでしまふよ」

ど、空嘯いた源太は、信吉に向つて。

「おい下村、貴様に珍らしい人を紹介して遣らう」

ど、再び凄い笑みを双頬に浮べた。

「三十一」

自分を此の儘に放任して置いて餓死させやうと云ふ蛇籠の源太の言葉を聴くと、流石の信吉も恐るべき彼等の計畫に一驚した、さうして源太が今や珍らしい男を紹介しやうと云はれると前夜座敷の外の談話を聞いて居る信吉は聲を勵まし。

「野口の如き友情に反くばかりか、恐しい真似をする奴に逢ふ必要は無いから、餘

計な事をするな」

源太は信吉が此の家に野口の居る事を、どうして知つて居るかど妙からず驚いたが態ざと平然として。

「察しの通り野口さんだ……」

ど、冷やかな笑みを信吉に浴せた、此の時座敷の外から。

「バーケン君は今日も流連けるらしいせ堀越君……」

ど、聲を掛けたのは確に野口賢作であつた、偕てはど知つた信吉は、二人の談話に注意をして居るど。

「本當に鼻の下の長い毛唐人だなア、あの方はどうする積りでせう」

「さうさねえ、兎に角僕の聞き込んで来た事もあるから、後とで一寸吉原まで行くど今電話を掛けて置いた。

「あゝ左様ですか、どうも御苦勞ですなア」

二人の談話を聞いて居た信吉は、初めて源太は野口の部下である事を知つた。

「此奴等はその獨乙人と心を合せて革命黨員の動靜を探つて居るばかりではない、ヒヨツとする此奴等は獨探だツ……」

と、心の中に首肯くと思はずブル／＼と五体を震はせ。

「何んとかして是れを其の筋へ密告する手段は無いかしら」

自分の身が危いのを忘れた信吉は、何んとかして此の憎むべき悪漢等の住み家を、其筋へ密告すべき手段は無いかと考へ始めめた。

「おい下村君、暫くだつたねえ……」

彼れはニコ／＼笑ひ乍ら、手には何物も持たずに入つて來た。

「おう野口……」

と、無念の拳を握つた信吉が。

「何んの必要が有つて僕を斯んな目に逢はせるのだ」

相手に兇器が無いのを知つた信吉はチリ／＼と詰め寄る。

「おい下村、僕は君から説教を聞かうと思つて入つて來たのでは無いよ」

と、云つて信吉の前に大胡座を掻き。

「改めて何も云ふ必要は無いが、下村君、一つ心を入れ返へたらどうかね」

と、云ひながら野口は聲を潜め。

「君は何んの見込みがあつて支那人のお先きに成つて居るのだ、彼奴等のやうな瘦せ浪人が、幾らヂタバタ騒いだつて、繪に書いた牡丹餅を喰はうとするやうなものだ、第一成功をした處が、旨い汁を吸ふのは支那浪人ばかりで、君なんぞは徒らに椽の下の方持ちをして居るのだ、夫れよりも今から僕と共に或る任務に就き給へな何もあんな奴等に義理を立てるより、日本人は日本人らしく我が國家の爲めに忠良の臣民になる方が可いだらう」

野口が最後の一言は些さか信吉の心を動した、けれども信吉は容易く野口の言葉に従ふやうな輕卒な男では無かつた。

「野口君……夫れは僕から君に云ふべきの言葉で、君は老獺なる元政府の爲に志士を附け覗つて居るのでは無いか、其のやうな君に僕の眞意は判るものか、夫れより

も早く心を改め給へ、僕は友人の情義を重んじて敢へて君に忠告をするッ」
 信吉は此際蘭子の一身に關する事は一言もしないで、只管野口を諫止するのであつた、すると野口はニツコリ笑つて信吉に向ひ。

「下村君……君の如き皮相の見を抱く者は、そんな議論も吐くのだ、まだ君は僕が外務省から或る囑托を受けて、自稱志士の行動を監視して居る事は君も知るまい……」
 と、憎むべき野口は言葉巧みに説き出した。

「三十二」

外務省から囑托を受けて、所謂中華民國の志士なるものゝ、動靜を探つて居ると云はれた時には、流石の信吉も一寸心が動いた、けれども夫れとして、彼等の行動は餘りに怪しいと信吉は忽ち彼等の權謀を看破り。

「野口君、僕には僕の信念があるのだから、此の上何も云つて下さるな」
 と、一喝を喰はした後ち。

「野口君、僕は不幸にして君等の手に幽閉される身となつたが、今日まで自分の執つて來た行動は仰俯天地に耻ぢぬ積りだ、であるから今に及んで君等の手に罹つて如何なる目に逢はふと敢て落膽もしなければ失望もしないから、君達の思ふ存分にして呉れ給へ」

斯う云つた儘信吉が口を噤んでしまふと、忌ましくしさうに舌打ちをした野口は、片頬に冷やかな笑みを浮べ。

「下村……貴様は友情に反くんだな」
 「敢て友情に反くと云ふ譯でないが、僕は君の様な奴が友情杯と人間らしい事を云ふのが可笑しくて仕様が無い、不肖ではあるが下村信吉は、貴様のやうな奴に身を托すやうな阿呆では無い、謂んや憎むべき不正の行爲をして不義の榮華に誇るが如き、北越男子の潔しとせぬ處だッ……」

と、絶叫した信吉は野口の面上をハッタと睨んだ。

「何んだと、不義の榮華……貴様云ふ事もあらうに、不義の榮華とは何事だ、次第に依つては用捨はしないぞ」

と、野口が詰め寄ると、少しも驚かぬ信吉は。

「野口……斯く自由を奪はれて囚はれの身となつて居ても、云ふべき事は云つて聞かせる、良心があつたなら一日も早く善心に立ち歸へれ、今から悔悟すれば遅くは無いだ、此の下村の云ふ事が判つたなら、警視廳へあの堀越の潜伏して居る事を密告して、貴様も眞人間に立ち歸つたらさうだ、夫れども他くまであの獨乙人の手先となつて他日世間から賣國奴の汚名を受ける積りなのか」
此の一言を聞くと見る／＼裡に顔の色が變つた野口が。

「何に賣國奴……」

「さうだ、今や東亞の風雲急にして、王師は何時海を渡つて、臥薪嘗膽二十年の恨みを晴さうと云ふ國家有事の際に、怪しい獨乙人と腹を合せて、憎むべき行動を執

つて居る事は僕の照魔鏡に歴然と映つて居るのだ」

「……………」

野口の顔色は忽ちの中に士の如くに變つてしまつた、さうして信吉の面を睨み返した彼れは。

「色眼鏡を掛けて見るから、さう見えるのだ、あの獨乙人は我れ／＼外務省の特別任務に従事する者が手先きに使つて居るのだ」

「嘘を吐け……」

再び一喝を喰はした信吉は。

「何んでも良い、僕が是れ程忠告をして遣つても判らなければ夫れまでの事だ、モウ何も云はんから彼方へ行つて居ろツ……」

信吉は半ば自暴自棄になつて居るから、野口に對して云ふべき事を云つてしまふとクルリと背中を向け。

「チア、殺ろすとも活かすとも勝手にしろ、此の上貴様に物を云ふのは口の汚れた

ツ……」

野口は何んと思つたのかチリ／＼と信吉の傍に進み寄り。

「下村、いざと云ふ場合になつて泣きツ面をするな」

「フムン、心頭を滅却すれば火も亦涼した、貴様の如き奴に男子の眞面目を解する事が出来るかツ……」

信吉が斯う云つて再び野口に嘲罵を加へた時。

「野口さん……一寸来て下さい」

と、座敷の外から聲を掛けた堀越は非常に慌てゝ居た。

「三十三」

何んと無く慌てゝ居る堀越の方を振り返つた野口は。

「何んだね君ツ……」

「少し急な用が出来ましたから一寸顔を貸して下さい」
「さうか……」

と、起ち上つた野口は。

「實は此奴が、何處で聽いて來たのか知らんが、我れ／＼を獨探だと吐かすから……」

野口は此の場合になつても未だ信吉の前では白を切つて居る。

「そんな事はさうでも可いではありませんか、假令そんな事を知つて居たにしろ、籠の中の鳥なら殺すも活すも此方の自由なんですから」

と、云つて野口の耳に口を寄せ。

「バーケンさんが吉原で拘引られたさうですせ……」

「えッ……」

思はず大きな聲を出した野口賢作は。

「何にツ、外務省から急用だと云つて呼びに來た、夫れでは直ぐに行かなければな

るまい」

さも事實らしく信吉を尻り目に掛けて此の座敷牢を出て行つてしまつた。

「どうも變だなア、あゝ云つて出て行く處はさうやら外務省から何か依頼を受けて居るやうだが、さうとしたら何の必要で僕を斯んな目に逢はせるのだらう、第一あの堀越と云ふ大賊……」

斯う順序を追つて考へ始めた信吉はボンと小膝を叩き。

「矢つ張り此奴等は元政府の密偵と獨探をして居るに違ひ無い、此の上は出来る丈け注意をして逃げられるものなら此處を逃げやう」

と、心の中に首肯くと同時に、野口の勧めを表面承諾して、此の家を逃げ出さなかつた事を恨んだ。

「然し、此奴等も中々用心をして居るから、旨く逃げる事が出来たかどうかは不明だ……」

と、僅かに自分で自分を慰めた信吉は、帝都の中央に斯る恐ろしい家があるのを、

心から驚いて居た。

「幾ら考へても成るやうにしか成らん、夫れよりも今度誰れか來たら何んとかして仲間の一人を欺して此の室を出る事にしやう」

と、誰れか此の室へ訪れるのを待つて居たが、此の時に奥の一室には、今しも野口を始め四五名の者が額を集めて密議を凝らして居た、其の中には驚くべし例の井上久米三も交つて居た、さうして今しも野口は大に慌てた様子で。

「さうすると、パーケン君は今朝拘引されたのか……」

「左様です……」

と、一膝進めた井上は。

「實は例の角海老で僕も遊んで居たのですが、昨夜堀越君とパーケンさんの來たのを知りましたから、今朝パーケンさんの部屋へ遊びに行かうと思つて居ると、七八名の憲兵が來て、有無を云はせず拘引して行つたのです、夫れで僕は萬一や堀越君も一緒に拘引されたのでは無いかと思ひましたから、夫れと無く調べると、堀越君

は昨夜の中に歸つたと云ふ事が知れたので喜んで引き上げて来たのですが、何にしろバーケンさんが抱引されたとするに我れ〜は此の家に愚圖〜しては居られませんせ」

「さうだねえ、夫れでは危険が迫つて居るのだから、直ぐに此の家を引き拂ふ事にしやう」

と、野口は餘程周章して居たが。

「然しバーケン君は此の根據地を自白するは事はないだらうなア……」

と、一同の顔を眺めると。

「いや外國人の事です、イザとなると意氣地が無いから、直ぐにペラ〜饒舌つてしまいますせ」

「さうだなア、夫れでは豫て極めてある通りの行動を執らう」

野口は見世にある金庫の中から幾束かの紙幣を持ち來たり。

「此處に千三百圓あるから、是れを分配して旅費にしやう」

軽く首肯いた堀越は。

「夫れはさうと、彼の下村の奴はどうしませう」

「さうだなア、毒藥を吞まさうとしても、用心深い奴だから飲むまいし、短銃で撃てば其の音で近所の奴が不思議に思ふからなア」

と、小首を傾けて居た野口は。

「構は無いから我れ〜の逃げて行く時、此家へ火を掛けて行かう、さうすれば下村の奴は焼け死でしまふから」

と、片頬に凄い笑みを浮べた、すると井上を始め一同も。

「成程、夫れが一番可い……」

と、憎むべき賣國奴の一團は、言下に無慘極まる野口の企てを賛成した。

憎むべき賣國奴の一團は、聴くも恐ろしき謀議を凝らして、座敷牢の中に幽閉してある下村信吉を焚死せしめやうとする相談は、忽ちの中に成立してしまつた。
「夫れでは愈よ彼奴を……」
と、門司の停車場で李銳陸將軍を一發の下に亡き者にしやうとした井上が起ち上つた。

「待つて呉れ井上ッ……」

両手を上げて井上を制した蛇籠の源太は満面に微笑を浮べ。

「あの下村と云ふ野郎には怨みがあるのだから、此の家を火を放ける前に一言引導を渡して遣るのだ」

「さうか、さう云ふ事なら早く用事を済まして來ねえ」

「ウン……」

と、堀越が奥の方へ入つて行くと、憎むべき井上は勝手許から石油の罐を持ち來り障子や畳へ盛んに石油を注ぎ初めた、此の物音を座敷牢の中で聞いた下村は。

「おや妙な物音がするが、どうしたのだらう」
と、小首を傾げて耳を澄した時。

「やい信吉ッ……」

自分と呼ぶ者があるのでヒョイと頭を上げると、セ、ラ笑つた源太が。

「やい、手前の生命もモウ一時間か二時間だぞ、然かも下谷署の留置場で世話をする爲めに、此の家を焼き拂らふから、手前は誰れの手も煩らはさずに極樂へ行けるぞ」

「えッ……」

と、顔色を變へた信吉は、恐るべき彼等の企てを聽いて齒を噛み鳴ら。

「カ……勝手にしろッ……」

と、絶叫したが、彼れが其の後の運命を知ると我れ知らず熱い涙がハラ／＼と膝の上に落ちた、折柄ら座敷の外で。

「堀越君、早く引き上げ給へ、どうやら形勢切迫して居るらしいから」

「さうですか……」

ど、後しろを振り返つた源太は。

「まア念佛でも唱へて居ろッ」

憎く／＼しい捨て臺詞を殘した源太は、見世の方へ出て行つてしまつた、するど入り代つて座敷の中を覗き込んだのは其の身を八ツ裂きにしても飽き足らぬ野口賢作であつた、夫れと氣が付いた信吉は。

「野口、此の期に及んで何も云ふ事は無いが、唯だ悪因悪果と云ふ事を忘れるな」此の一言を聞いた野口は。

「餘計な迷ひ言を吐かすな、夫れよりも僕の云ふ事を熟ッく聞いて置けよ下村ッ……」

ど、冷やかな笑みを浮べて。

「新海に居る兒玉蘭子は、男の意地で屹ッ度僕の女房にするから、地獄から見物して居ろ」

「何にッ……」

流石の信吉も此の一言を聞くときも口惜しさうに野口を睨み返した。

「何んだ其の面は……」

ど、憎むべき野口は、下村に對してカツと青唾を吐き掛けて出て行つてしまつた。

「あゝ……」

翼無き身の信吉が、我れ知らず絶望の聲を放つた時、見世の方に當りてパチ／＼と怪しい物音が起つた。

「惜てはッ……」

斯うして居ては徒らに焼死するより外は無いと信吉が、双腕に満身の力を籠めて、鐵の襖を押し破らうとすると、驚くべし黄煙がサツと入つて來た。

座敷牢に入れられた下村信吉は、野口を始め堀越から死の宣告をされた、夫れも恐るべき生きながら猛火の中に葬らうと云ふ驚くべき宣告であつた、が彼れは斯んな場合に迫つても、何んとかして一方の血路を求めて此の家から逃げ出さうと、鐵で作つた襖を破らうとする時、表の方には異様な響きがして、然かも黄煙がサツと室内へ渦を巻いて入つて來たので。

「あッ……」
と、絶叫して室の隅々を無理にも打ち破らうとしたが、如何ともする事が出来無いので。

「残念だが死を待つより詮様が無い」
絶望の聲を放つた彼れは、無念の形相恐ろしく吹き入るゝ煙りを先きをジツと眺めた。

「何んとかして……」
彼れは猛然として再び立ち上つた時、意外千萬にも見世の方は當つて多勢の聲がす

る。

「おやッ……」
と、耳を聳てるど、どうやら人々は此の家の者と格闘を續けて居るらしい。

「楮てはッ、悪漢共は警官に建捕されるのかッ……」
信吉は斯う思ふと、渦巻く煙りの中にあり乍らも勇氣が百倍して。

「此處に座敷がある……誰れか來て助けて下さい……」
呼べど叫べど火勢に煽られて少しも外へは聽へ無い。

「どうしたのだらう、神や佛は正義に與しないのかしら」
正直眞ツ法な信吉は、今や神佛さへも怨み出して。

「助けて呉れ！……誰れか來て助けて呉れ……」
三度び呼んだ、四度び、五度び絶叫したが、どうしても人々の耳には通じないと見えて、依然として格闘を續けて居るらしかった、最後に信吉が。
「助けて呉れ……」

聲を絞つて最後の救ひを求めた時には、座敷の四隅には紅の炎がペロペロと傳つて部屋は一杯に黒煙が漲り息をする事も出来ない。

「あゝ……」

信吉は悲しい叫びを上げて遂に其の場に倒れたが、其の時。

「誰れか奥の方で救ひを求めて居る者があるぞ、今の内なら助けられるから誰れか飛び込んで見ろ……」

と、命じて居る人がある、此の聲が耳に入ると信吉が渦巻く黒煙の中に三度び起ち上り。

「タ……助けて……」

と、救ひを求めた時、座敷の外には既に敗ひに來た消防夫が追つたと見えて、ガリ／＼と手鍵の音がした。

「タ……助けて……」

煙りに咽せぶ信吉は息苦るしいので最早や是れよりも聲が出なかつた。

「少し我慢をして居ろッ……」

外には猛火を犯して信吉を救ひ出さうとする消防夫が、四五名も來て居るらしい、が此の時には火は全家に廻つてしまつたと見えて、宛ら焦熱地獄に身を置くやうで信吉は徒らに、室内を狂ひ廻るばかりであつた、何處から注ぐのか天井から水が流れ入るが猛火に包まれる狭き室内には何んの手答も無い。

「タ……駄目か……」

と、信吉が悲しい聲を出した時、驚くべし棟木がメリ／＼と、哀れなる信吉の頭上に焼け落ちた。

「三十六」

薄命の青年上村信吉が、大紅蓮の如き炎の裡に包まれ、將に焼死せんとする時、消防夫の爲めに救ひ出されやうとしたのであるが、危機一髪と云ふ其の刹那凄じき音

を立て、棟木が信吉の頭上へ焼け落ちた爲め、一道の火光天に沖したと同時に彼れは。

「ウーン……」

ど、苦しき聲を發して知覺を失つてしまつた、さうして彼れは虫の息で消防夫の鍵の先きで引き摺り出された事も全然知らなかつたが、日華洋行を落ち延びた賣國奴の一團は肝腎の獨乙人バーケンが吉原から拘引されたと聽いて居るから、落ち着く先きを極めて置いて一とまづ解散する事となつた、けれども井上や堀越は首領野口と豫てから最後を場合に於ける手筈を極めてあるから、神田を落ち延びると、直ちに東京を去つて支那に渡るべく姿を消してしまつた、部下を落してしまつた野口は非常線の網を巧みに潜つて、數日の後には下の關に姿を現して出た、處が大膽不敵にも、下の關に居るべき筈の野口が忽然と新潟に現れ、金の力で信梗家に稼いで居た蘭子を落着かせた後、再び東京へ舞ひ戻つた、今は蘭子も信吉の頼み難きを歸めたのか、或は虚榮の夢に墮がれて居るのか、以前とは丸で違つてしまひ、野口

に對して滿身の愛を捧げて、見るも美しいやうな情交を續けて居る、さうして二人は暫し見晴らしの良い大森海岸の高臺へ立派な家を構へ、蘭子は母親の道子まで迎へて女中や下男の多くを使つて不義の榮華に誇つて居る。

「旦那様、コーヒーを召し上げ」

ど、其の朝の新聞に眼を通して居る野口に對して、コーヒーを運んで來た蘭子は、朝の化粧を済まして良人の前に來たのであるが、芳町一番の大丸鬚も好う似合つて美しい綺致を一段に引き立てゝ居る。

「蘭子さんのお手製かい……」

野口は金口の巻煙草をボンと庭へ捨てゝ美しい妻の面へヂツと眼を注いだ。

「はい……」

ど、蘭子が耻かしさうに頭を下げると、ニツコリ笑つた野口が。

「嘘を旨いだらう、お前がお手製なら屹ツと尻の方から旨いに違ひ無い」

「知りませんわ……貴郎……澤山そんな事を仰しやい、明日の朝から妾しはモウ府

「へませんから」

態ざとツンとすると、一寸頭を下げた野口が。

「是れは飛んだ失禮……餘程逆鱗に觸れたと見える、然し事實は生ける証明者で否定する事は出来無いでは無いか」

と、野口は頗る眞面目である。

「あら……夫れですから明朝から妾くしが拵へ無いと申し上げて居るではございませんか」

「は、さう怒り給ふな、實を云へば旨く出来て居るんだが、實は一寸お前を怒らして見やうと思つて、斯んな事を云つたのさ……」

「あら、随分お人が悪いのねえ、どうせ妾しは馬鹿ですから、そんな事を仰しやつて澤山廻り者に遊ばせ、其の代り屹ッ度仇を取つて上げますから」

「事態頗る穩かで無くなつたねえ、敵を取るには若干心配だが、蘭さんの策戦はどんなものだね、一寸洩らして呉れ無いか」

「存じません……」

と、蘭子が後を向くと。

「そんな氣強い眞似をすると斯うだよ蘭さん……」

と、寄り添つた野口が蘭子の腋の下を標と。

「御免遊ばせ……貴郎……そんな眞似を遊ばして、女中にでも見られると……」

斯う云つて蘭子が逃げやうとする時。

「朝から腎作さんに世話を焼かせて居るかい蘭子……」

仲の好い夫婦の様子を眺めた母親の道子は、ニコ／＼笑つて入つて来た。母親の道子が嬉しうな顔をして入つて来たのを眺めると、良人の野口は笑顔で迎へへ。

「三十七」

「母アさん、蘭子は實に我儘で不可ません、僕が手を合せるやうにして頼むのに、明日の朝からコーヒを拵らへ無いのと云ふのですもの」

お道は軽く首肯して。
「賢作さん、貴郎が餘り可愛がり過ぎるから此の娘が段々増長するのですよ、是れから少し叱言を云つて下さい」

と、云ふものゝお道の面上には微笑が浮んで居た。

「あら嘘そよ、母アさん、良人では妾しの拵へたコーヒーがお口に合はぬとか、砂糖が足りないとか云つて難癖を付けるのですもの……」

「あら嘘そですよ母アさん、蘭子は貴女がお入來になつたものですから、馬馬に氣が強くなつて……」

睦じい新夫婦は根も無き事を争論の種として心にも無い云ひ合ひをして居るのである、此の有様を嬉しうに眺めて居たお道は。

「本當にお前方は呑氣だねえ、夫れと云ふのも賢作さんが斯うして優しくして下さい」

るからなんだよ、蘭子それを可い事にして昔のことを忘れると本當に罰が當りますよ」

と、たしなめられた蘭子は。

「夫れは母アさん、妾しだつて知つて居ますわ」

「だからさア、少し位賢作さんが無理を云つても我慢をしないではいかいか」

「たつて憐ぐるのですもの……」

「ホムム、本當に餘り仲の好いのも困るねえ、然し朝から晩まで妙な顔をして睨み合つて居るより何の位可いか知れないぬえ」

と、云つてお道に急に何か思ひ出したものゝ如く。

「時に蘭子……お前まだあるのかい」

怪訝の顔をした蘭子は。

「あるのかつて何がです母アさん」

「何にがつて、斯う云つたら大概判りそうなものだ」

「判らないわ母アさん……」

解し難き母の一言に暫らく小首を傾けて居た蘭子は。

「何がです母アさん、貴女の仰しやる事は宛で謎のやうですわ」

「ホムムム、何歳になつても子供だねえ、外では無いが、私しだつてモウ先きが無いから、孫の顔を見てから行く處へ行き度いからねえ」

斯う云はれると始めて夫れと氣の付いた蘭子が。

「知らないわ妾し……」

と、美しい面を眞ッ赤にした。

「知ら無いではないよ、本當に早く可愛い孫の顔を見るのが何よりの楽しみなんだから」

「ホムムム、厭なお母アさんだわ」

「ハムムム母アさん、貴女のやうにさう眞正面から請求されても、是ればかりは授

りものですからなア」

と、野口も笑顔で以て迎へた、すると一人の女中が闕際に手を突いて。

「あの御老母様……」

何か用有り氣の風情である。

「何か用でもあるのですか……」

「はい……」

と、モチムとして居たが。

「何んですか身装の汚ないお爺さんが、貴女様が奥様に、是非お目に掛り度いと申して玄關に立つに居りますが、如何致したら可いでございませう」

「お爺さんが……？」

お道の面には忽ち暗い影が宿つた。

「お前其の人の名前を聞いたかい」

「はい、下村徳平と云へば、御隠居様でも奥様でも良く御存じだと申して居ります」

……」
此の一言を聞くと蘭子の面にも忽ち心配らしい色が浮んだ。

「三十八」

下村徳平と云ふ一言を聞くと、今まで睦じさうに新妻の蘭子や義母のお道と戯談を云ひ合つて居た野口賢作の面上にも黒い影が宿つた。

「お母アさん、玄關へ貴女を訪れたのは、信吉の親父でせう、あの蘭子さんに散々苦勞をさせて行方不明になつた下村信吉の父でせう」

と、野口の語尾は力が籠つて居た。

「はい、左様なのです」

婿の眞意を圖り兼ねたお道は我が娘蘭子へ眼を移して。

「ねえ如何したら可いだらう」

今は野口のお蔭で、娘も自分も幸福な生活を送つて居るお道は、信吉と野口、徳平翁と野口の父清之の關係を知つて居る爲め、徳平翁の來訪には頗る當惑して居るらしい。

「お前、母アさんが御在宅だと云つたのかい」

蘭子が斯う云つて女中に聞くと、様子有り氣と見て取つた女中は。

「はい……」

と、小さくなつた、すると野口は一旦消した金口の巻簾へ再び火を移して親娘に向ひ。

「折角訪ねて來たのですから逢つて遣つたら可いでせう」

「はい……」

と、返辭はするものゝ、お道にも多少の良心があるから、今更ら徳平翁に逢ひ度くはないらしい。

「おい、御客様をお母さんのお部屋へお通し申したら可いではないか、何時までも

玄關にお待たせ申すのは失禮になるよ」
主人から斯う云はれると、今まで小さくなつて鬨際に手を突いて居た女中もホツと重荷を卸し。

「夫れでは彼方へ御案内申して置きます……」

「おつ母さん、お差支へが無ければ僕も逢つて遣りますよ、彼の男も信吉の行方不明以來嘸ぞ世の中を悲観して居ませうから、會つて慰めて遣りませう、何を云つても故國の者は何處となく慕しいもんですから」

「有難うございます」

萬事に賢作へ氣を置いて居るお道は軽く頭を下げ。

「蘭子さんも賢作さんのお許しが出たら一寸伯父さんに逢ふ方が可いよ」

「面倒ですわねえ、何も今になつて向ふで望みもしないのに此方から進んで會はなくても可んでせう」

蘭子は昔しの蘭子でない、美しい縹致や姿は昔しに變らぬが、其の心は虚榮に撞か

れて、未來の良人と相許した信吉とは仇同志のやうな野口に身を委せた丈けあつて昔しの様な優しさは露程も無くなつて居た、昔しの様な温かい意は何時の間にか麻痺して、今は氷よりも冷たくなつて居た、徳平と云ふ言葉を聞いてさへ、不快らしい面をする女となつて居た。

「そう云はずに會つて遣りなさい、今では親不孝者の信吉が居なくなつて世の中を淋しく暮らして居る、哀れな爺さんなんだから」

今は反つて野口の方が温かい意を持つて徳平翁を待つて居る、此時表玄關の上り口に突つ立つたお道は。

「おや徳平さん、良く此處が判りましたねえ」

ど、汚苦るしい徳平翁の姿を見下ろして額に八の字を寄せ。

「そんな風をして表から來られては、婿に對して私し達が困りますから、勝手許へ廻つて下さい」

ど、お道はいと冷やかである。

「道子さん、俺しに勝手許へ廻はれと云はつしやるのかね」
久し振りの挨拶もせぬ中に、勝手許へ廻れと云はれた徳平翁は、恨めしさうにお道の面をヂツと見上げた。

「三十九」

兒玉お道から冷たい言葉を掛けられた下村徳平翁は、恨めしさうな面を上げた、老の一徹に口惜し涙をハラ／＼と流し、双の拳を堅く握った。

「お道ごの、態ざ／＼尋ねて来た俺しに、勝手許へ廻れと云はつしやるのか」
徳平翁の聲は太く震へを帯びて居た。

「さうですよ、そんな穢い風をして立開へ来られては迷惑ですから」

「何んだと……」
思はず大きな聲を出した徳平翁は。

「俺しは物乞ひに来たのでは無い、イヤサお前達親子に無心に来たのではありませんぞ」

「當り前ですわ、貴郎に無心なぞをされる因縁はありませんよ」

お道は以前と違つて宛ら人違のしたやうに傲慢の態度である。

「失禮千萬な、以前の事をお忘れになつたのかお道殿……」

「忘れないからお前さんに會つても斯うして話しをして居るんですわ」
と、飽くまでも徳平翁を侮辱して居るお道は。

「用事があるなら早く云つたら可いでせう徳平さん」

「ハ、餘程精神が變つたのう、是れも虚榮ごやりに眼が眩んだ結果ぢやらうが、考へて見ればお氣の毒千萬だ、實に容易ならぬ事を聞き込んだので、昔しを忘れずに態ざ／＼御注意に来たのだ、貴女が左様な御量見なら致し方が無いから俺しは是れで失敬する、兎に角萬事に氣を付けて、後で世間から後しる指を差されぬやうになさい、是れ丈けは徳平が貴女達親子に對する厚意ある一言だから」

と、云ひ置いて翁が立ち去らうとする。

「おつ母さん……」

と、後しろから聲を掛けた賢作が。

「貴女はお人が良くて不可ません、今あの老人は何んど云ひました、容易ならぬ事を聞き込んだから注意に來たとか申したではありませんか、一体どんな注意か座敷に上げて聞いて御覽なさい、必らず僕に對する悪口か、中傷に違ひ無いと思ひますから、愈よさうなら僕にも些さか考へが有りますから、兎に角座敷へ通したら可いでせう」

と、云はれてお道は軽く首肯さ。

「夫れも左様ですなえ、夫れでは一つ呼び戻しませう」

と、表へ出て行く徳平翁の後を追ひ掛け。

「徳平さん、兎に角一寸お戻り下さい、私しが悪かつた事は平にお詫びをしますから、一寸お戻り下さい」

「ハ、まだ幾分の良心が残つて居るな、矢張り此の儘に俺しを歸したら氣に掛る事があるのだらう」

と、後どへ戻つて來た徳平翁は、お道の案内で奥座敷へ通り。

「立派なお住居だのう、然しお道殿、不義の榮華は何時までも續くものではありませんぞ、俺しは決して蘭子さんが此の家の主人と夫婦となられた不信を責めるので無い、依然として蘭子さんが可愛いから御注意をするのだが、貴女は賣國奴の母となり、娘さんは賣國奴の妻となつて居るのではありませんか、悪い事は今の中に潔く處決をなさらんと悔いても及ばぬ事が出來ますぞ……」

兒玉親子の身の上を思へばこそ、徳平翁は老の身で態ざく訊れて來て、苦諫するのであつた、面を犯した親娘の處決を促るのであつた、すると此の忠告を隣室で聞いて居た賢作はツカ／＼と此の室に入つて來て。

「徳平……唯今、蘭子の母親に云つた事を、モウ一度僕に向つて口外して見ろ」
と、一喝して詰め寄ると。

「貴様如き奴に物を云ふのは口の汚れた、俺しは畜生と言葉を交す程甚碌はして居らん」

と、徳平翁は賣國奴賢作に向つて罵り返へした。

「四十」

徳平翁の一言には流石の野口も言葉を返へすことが出来なかつた。

「何んだと下村ッ、此處は誰れの家だと思つて居るッ……」

野口の唇は色が變つて居た、徳平翁の返辭次第で、如何なる亂暴をするか判らないうやうな風情を見せた、けれども徳平翁は少しも驚く様た事はなかつた。

「云はずと知れた憎むべき賣國奴の家だッ……」

「何にッ賣國奴の家ッ……」

「さうだ、今や歐州の政局が急轉直下して、露佛が獨乙の横暴にも無名の戦ひを起

したのを膺懲さうとして躡起した爲め、我が同盟國たる英も劍を執つて起つた、其の餘波は遂に東洋までに及んで、今や山東の一角は暗雲に閉ざされて居るでは無いか、遠遼の恨みは二十年來我が國民が臥薪嘗膽、時の至るのを待つた其の報復の時期は迫つて居る、此の時此の際、貴様は曩きに元政府の廻し者であつた井上、堀越等の惡漢等と氣脈を通じて、今では身を八つ裂きにしても飽き足らぬ獨探となつて不義の榮華に誇つて居るのではないか」

何處で聞いて來たのであらう、何うして是れを知つて居るのであらう、徳平翁は寄らば打たんの身構へをして。

「夫ればかりでは無い、我が子信吉を幽閉した家へ火を附けて、遂に焚死せしめたではないか」

斯う云ひ終る徳平翁はハラ／＼と涙を流し。

「然し、俺しは是れも悴の不幸と諦めて今は何も云はんが、氣の毒千萬なのは、金に眼が眩んで、貴様に身を任せた蘭子と、此處に居るお道さんだ、俺しは昔しのこ

を思へばこそ斯うやつて二人の者に忠告を與へに来たのだ、早く貴様の處を去れと注意に来たのだ」

驚くべし徳平翁は、我が子信吉が彼れ等の手に掛つて、日華洋行へ幽閉された事まで知つて居る、其の家に火を掛けて悪漢等の立ち退つた事まで知つて居る、流石の野口も呆然として暫しは穴の明く程徳平翁の面を噴めて居たが。

「此奴は、氣が狂つて居るのです、早く巡査を呼んで来て引き渡した方が可いでせう」

と、お道に目配せをした時。

「そんな事をなさるのは此方の不利益ですわ……」

と、此の室へ入つて来たのは大丸鬚に髪を結んだ蘭子であつた。

「徳平さん、妾し達が如何ならうと大きなお世話ですよ、他人の頭痛を疝氣に病むものではないわ」

と、冷やかに笑つた蘭子が。

「ねえ貴郎……」

と、野口に向つてニソコリ笑ひ。

「此の爺さんを生かして置いては爲めになりませんわ」

蘭子は何時の間にか恐るべき毒婦に化して居た。

「左様だなア、何んとかせなければ我れ〜夫婦は枕を高くして眠ることが出来ぬのう」

良人の言葉が終らぬ中に。

「野口賢作の妻蘭子は貴郎に今日までのお禮をしますよ」

と、云つて徳平翁の背後に廻つた蘭子は、突然懷中から手拭を取り出して翁の首へ捲き付けたと思ふと。

「良い醜状だわねえ」

と、力に任せて繰り上げた、抵抗する間も無い徳平翁は。

「ウーム……」

悲しい苦悶と共に虚空を掴んだまゝグツタリ頭を垂れてしまった。

「アッ……迂奴ッ……蘭子ッ……」

猛火に包まれて將に焼死せんとする處を救ひ出された下村信吉は、人事不省に陥つて居るので、附近なる駿河臺病院に收容されたが、彼れは昏酔状態は收容當時から夕暮まで續いて主治醫も今は首を傾げ出した時、昏酔状態の中に結んで居た悪夢から覺めた信吉は漸く氣が付いた。

「オ、夢であつたか……」

ど、四邊りを見廻すと共に身内の痛さを深く感じた。

「オ、氣が付いたかね」

ベットの脇きに佇立んだ主治醫はにつこり笑つて。

「傷は軽いから緊りしなさい」

ど、云はれて信吉は、初めて猛火の裡から救ひ出されたのを知つた、さうして恐ろしかった父の危難や蘭子が野口の妻となつたのが夢であつたのを喜んだ。

「四十一」

信吉が漸く正氣付くと、主治醫も大に喜んで其の面上に微笑を浮べ。

「君ッ、緊りせんければ不可んよ、傷は極く軽いのだから、」

斯う云はれて、病床へ起き上らうとした信吉は、身内の痛さに顔をしかめた、さうして醫師に向ひ。

「甚だ失禮でございますが、腰が痛みますから此の儘で御免を蒙ります」

其の言語が明瞭りして居るので主治醫は尠からず驚き。

「無理をしては不可んよ、兎に角二三日は静かに寢て居給へ……」

「ハイ……」

ど、返辭をして信吉は、覺めた夢の跡を追想して、萬一にも夢に見たやうな忌まはしき事があつたら如何したら可からうと心を痛めるのであつた。

「夢だから可いやうなもの、萬ヶ一にもあんな事になつたら僕は到底生きては居られない」

ど、心の中に自問自答して居たが、自分は今何處の病院に收容されて居るのか夫さへ判らないから。

「先生、私は萬死の裡に誰方かに助けられたのでせうが、一体此處は何處の病院でございますか」

醫師はニツコリ笑つて。

「此處は駿河臺病院だよ」

「おう左様ですか……」

信吉は今更ら乍ら人の運命と云ふものはどう轉化するか判らないと云ふ事を切實に感じ。

「私は丸で夢のやうでございます」

「さうだらう、其の筋の方も、君を救ひ出す事が出来たのは實に不思議千萬で、幸ひにして君の生命を取り留め得たら夫れこそ實に奇蹟だと云つて居たよ」

「左様でございます、私も到底救助されるとは思つて居りませんでした」

「兎に角運の好い人だねえ」

ど、云つて居る處へ、病院からの報告に依つて出張して来た、神田警察署の警部と數名の刑事巡査が、ドヤ／＼と此室へ入つて来た。

「種々と御厄介でした、被害者は氣が付いたさうですな」

此の聲を耳に入れた信吉が、痛さを堪へて起き上らうとすると。

「無理に起きなくても可いよ」

警部は至つて親切である、さうして彼れは信吉に向ひ。

「飛んだ災難に遭つたねえ、然し危い處を助かつたなア」

ど、温顔に微笑を浮べて居る。

「夫れも是れも、皆さんの御蔭でございませぬ、私しは此の御恩を終生忘れませぬ……」

警部は黙つて首肯いた、さうして信吉が思つたよりも元氣の旺盛なのに驚いた。

「處でお前に聞くが、どうしてお前はあの日華洋行に幽閉されたのだ、其の筋では今後の捜査方針を立てねばならないから、知つて居る事は残らや話して呉れ……」

「ハイ……」

信吉は今日までの事を落ちも無く警部に物語つた、さうして自分は彼れ等は元政府の刺客であると共に、今は獨乙人の結托して、恐ろしい行動を執つて居るらしいと云ふ、自分の想像も附け加へて答へた、すると警部は一々首肯いて。

「さうだつたのか、幸にして其の堀越と云ふ奴は、先刻築地の元居留地にある或る外國人の家で捕縛したが、井上と云ふ奴と野口と云ふ奴は遂に非常線を巧みに破つて逃走してしまつた」

と、残念さうに拳を握つた警部は。

「下村、此の事は新聞記者などが聞きに來ても口外をしては不可んよ」
 と、今後の探偵上の一大障害が起るので、警部は呉れくも注意をした後ち。
 「夫れでは本職は歸るから悠り養生をなさい」
 と、注意をして戻つて行つた、が此の時隣室のベッドの上で、此談話を聞いて頻りと首を傾げて居る男があつた。

「四十二」

神田署の警部や刑事巡査が一應の取調を済ませて歸つて行く。

「越堀の奴が捕縛されたのは痛快だなア、夫れにしても野口の奴は何處へ潜伏して居るのだらう」

信吉は憎くむべき堀越の捕縛を喜ぶと同時に、其の身を八ツ裂きにしても飽き足らぬ賣國奴野口が、今は如何なる處に潜伏して居ると、頻りに思ひを廻ぐらして居る。

ど。

「お眠みですか……」

ど、一人の看護婦が入つて来た、夫れと氣の付いた信吉が。

「いえ起きて居ます」

ど、寝たまゝで其方へ面を向けると。

「妾くしの受け持つて居る患者さんが、貴郎にお目に掛り度いと仰しやいますが、お差し支へはありませんか」

「僕にですか……」

「左様です……」

「どんなお方ですぞ、僕に會ひ度いと仰しやるのは」

「千住の方から来て居る方なのですが、何んですか蘭子さんと仰しやる婦人を熟く知つて居るお方だと申すことでございます」

「何んですつて、蘭子さんを知つて居る人で千住の……」

意外千萬の一言を聞いて流石の信吉も呆氣に取られて居たが。

「看護婦さん、其の人は男ですか夫れとも婦人ですが」

「男子のお方でございます」

「蘭子と云ふ婦人は、僕と親戚の間ですが、今僕に會ひ度いと云ふ人は、二十三四の丸顔の男ではありませんか」

萬一や憎むべき野口ではあるまいかと信吉が胸を躍らすと。

「イエ、お年の頃は四十二三で、デッブリ肥えたお方です」

「何に、四十二三で肥満した男……」

信吉は多くの知人を念頭に浮べて見たが、どうしても思ひ出せない。

「兎も角お目に掛つて見ますから左様仰しやつて下さい、然し醫師の注意がありますから、横になつたまゝで失禮を致しますよ」

「イエ、そんな御斜酌には及びません」

「夫れなら直ぐにお目に掛りますよ」

「左様ですか、ではさう申しませう」
看護婦が出て行つたかと思ふと、入れ違つて一人の男が入つて来た。

「御眠みの處を飛だ失禮を致します」

「イエ……」

と、其の男の方に面を向けると、未だ一面識も無い男だが、何處となく人柄の好い職人風の患者であつた。

「飛んだ御災難でしたねえ」

と、其の男は頭や手へ縫帶をして居る信吉の痛た／＼しい姿を眺め。

「起きますと縫つた傷所が破れますから、此の儘で失禮を致します」

「どうぞ其の儘で居て下さい……」

と、云つて其の男は畳葉を重ね。

「甚だ突然ですが、貴郎が先刻警官へ、兒玉蘭子と云ふことを仰しやいましたが、其の方はまだ新潟で藝者をして居るのですか」

と、聞かれると信吉は、何うして此の男が蘭子の事を知つて居るのかと妙からず驚

「えゝ藝者をして居るやうですが、貴郎はまた、どうして彼の婦人のことを御存知

なのですか」

「夫れには種々深い理由があるのですが、貴郎が今し方警官の取調べに、兒玉蘭子さんの事を仰しやつたから失禮ながら伺つたのです、實はまだ蘭子さんが藝妓をして居るなら、あの婦人に同情を寄せて落籍しやうと云ふ篤志家があるのです」

「何に、蘭子さんに同情して落籍？」

信吉は呆氣に取られて其の男の面をヂツと噴めた。

「四十三」

意外の言葉を聞いた信吉は。

「何んですつて、蘭子さんを落籍する御方があると仰しやるのですか」
 寢耳に水のやうな此の一言には、流石の信吉も唯だ驚愕の眼を睜るのみであつた、
 すると此の男はニツコリ笑つて。

「突然斯んな事を云ひ出したので、嘘ぞ驚いたでせうが、實は私しも蘭子さんを知つて居るのです」

「えッ貴郎も……」

信吉には何が何んだか薩張り様子が判らなくなつてしまつた。

「私は南千住で網打ちを稼業として居る彦五郎と申す者なのです、處が先月の初めに蘭子さんが、隅田川で悪漢の爲めに危い目に遭ふのを助け申したのが私しな
 ので」

「おう左様でしたか……」

其の事は蘭子が虎口を逃れて長岡へ歸つた時、悉しく聞いて居た、世には鬼も有るが佛も有るものよと、信吉は當時彦五郎は行友家の兄妹のことを頼母しき人心と思

つて居たのであるから、今不思議な場所此の彦五郎に會ふと信吉は、其の奇遇に驚いた、其の不可思議の縁に驚いた、と同時に、彦五郎に會つたことを非常に喜び
 び。

「其の事は故郷へ歸つた蘭子さんからも聴きました、貴郎方の御厚意を喜びました
 が、夫れでは今日蘭子さんの境遇に同情して落籍させて遣らうと仰しやるのは、行
 友家の御令息なんですか」

「……………」

「さうなのです、是れには種々理由もありますが、若様は一方ならず蘭子さんに同
 情を寄せるし、妹御様も蘭子さんの様な姉さんがあつたらどの位楽しからうと仰し
 やるのです」

「……………」

信吉は此の一言を聴くと、臆氣ながら行友家の子息章の眞意を察する事が出来た。
 「左様云ふ譯けでしたか、蘭子さんが歸國された後、私しは淺草田畝で何處の奴

かは知れぬ者に暗撃をされて、右の足へ負傷をしまして此の病院へ入つたのです、
處が先刻貴郎が警官の取調に對して蘭子さんの事を仰しやるのが耳に入つたので伺
つたやうな次第なのでございます」
此の話しを聞いた信吉は、何んもなく、自分と蘭子の將來に、不安の念が起つて來
た。

「あゝ左様ですか……」

と、返事に力が無い、すると網彦は信吉と蘭子の關係を知らぬから。

「實は若様も先日蘭子さんを助けた時に、直ぐに落籍させやうと云つたのですが、
あの婦人は何故か夫れを承知しないのです」
と、云つて尙ほも言葉を續け。

「左様云ふ譯けですから、一つ貴郎から蘭子さんを説いて、落籍させたら如何で
す」

「さア……」

流石の信吉も此の返答には少からず當惑して居たが。

「兎に角私しから手紙を出して、行友さんの御厚意に従はせるやうに致しませう……」

「どうぞ左様して下さい、愈此の話しが纏まれば、私しも若様に對し非常に
良い男になるのですから」

信吉は斯う眞ッ向ふから斬り込まれると些さか不快の念が起つた。

「然し蘭子さんに對して行友家の子息はどんな心持ちを抱いて居るのである、萬一
僕が想像をして居る通りで、心から蘭子さんに同情して落籍させた後……」
と、信吉の胸中には、またしても一つの心配が起つた。

「四十四」

信吉は網彦から行友家の兄妹が、蘭子に對する厚意を聞くに、世には篤士家もある

ものよと喜んだ、と同時に彼れは行友家の兄弟が同情の涙に依つて蘭子を花柳界から出して貰はうと思つた、けれども蘭子の悲しい境遇を救はうと云ふ行友家の子息の眞意を熟考して見ると。

「矢ッ張りさうだ、敵は本能寺にあるのだ、蘭子さんを彼の社會から出して置いて後だから……」

信吉の煩悶と懊惱は幾日か續いた。

「後とは百二十圓の借金だ、僕の手であの借金は返へして見せる……」

と、決心をすると其の後は馴染になつた網彦に會ふ度びに。

「まだ何共返辭を申して来ません」

と、まだ一度も手紙などは出して無いのに出鱈目の返辭をして置いた。

「あア左様ですか、何にしても妙ですねえ、あの人も餘程茶人だ、何んとか返辭をして來ても可いでせうに」

今は蘭子の眞意を解し兼ねて網彦は、忌味を云ふやうになつた、さう斯うする中に

重からの信吉の負傷は全快して、今日は退院する事となつた。

「種々御世話になりましたが、僕は今日退院しますから御挨拶に參りました」

「あゝ左様ですか、私も二三日中に退院します、就ては私が退院したら千住の家へお入來なさい、及ばず乍ら貴郎一人位はどうでもしますから、さうして行友家の若様にお目に掛つて置いた方が、是れから將來に何かお前さんの爲めになる事がありますせ」

「有難うございます」

信吉は嬉しき網彦の好意を謝して十五日目で退院すると、其の足で神田署へ出頭した、依然として井上や野口の消息は判らなかつた、さうして堀越は如何に嚴重なる取調をしても日華注行の事は白をしない、と共に彼の怪しい獨乙人パーケンは、依然剛情を張つてまだ罪状を白せぬ事が知れた。

「實に憎むべき奴等です、彼奴等が如何に詭辯を弄しませうとも野口や井上と關係の無いことはありません」

と、信吉は自分の知る限りを報告して、ひとまづ下谷の木賃宿越後屋へ引き上げたが、彼れは如何にも彼の野口の一味を其筋の手へ引渡し度いと云ふ決心をした、夫れが爲めには晝間學校へ行つて居ては萬事の都合が悪いので。

「一層思ひ切て晝間は彼奴等の探偵に従事して、夜間學校へ行く事にしやう、左様したら何かの手懸りに便利だらう」

斯う決心すると彼れは直ちに王城法學の夜學部へ藉を變へて、晝間は鞭棒を握つて市内目貫の場所を選みつゝ僅かの賃錢を稼ぎながら野口を探して居た、今日も今日とて神田のお茶之水で客待ちをして居ると。

「おい、彼處に居る車夫は、下村だぜ」

と、五六の書生がツカ／＼と彼れの前に馳せ寄つて。

「ウン下村だ、何んだ、クラスでは我れ／＼の上席に居るが、下村は人力車夫なんだ」

「おう下村か……」

「……………」

彼れは豫て意地の悪い學友が斯う云て自分の前に突つ立たたので、耻かしさうに頭を下げ。

「皆さんお揃で何處へかお出掛けでございますか」

と、聲を掛けると一同は信吉の面を冷やに見下ろして。

「我れ／＼も名譽だなア、斯んな車夫を自分等の級長にして居るのだから」と、嘲笑を浴せたと思ふと一同に向つて何か目配をした。

「四十五」

多くの級友に取り捲かれ、聴くに堪へざる侮辱を與へられたが、信吉はチツと耐らへ。

「諸君、僕の如き學友を持たれるは御不名譽でせうが、見らるゝ通り貧家に生れた

ので、學費に乏しいので止む無く斯んな勞働をして居るのです、惡からず思つて下
さいまし」

無念の涙を呑んだ信吉が一同の前に頭を下げる。

「何にッ學費が無い……」

と、一喝した年嵩の學生は。

「學費が無ければ學校に上がらなければ可いのだ、第一級長面が聞て呆れらア、斯
んな奴が我れくの級長なら僕はモウあんな學校へは行かん、郷里の父兄に申譯け
が無いから」

理不盡なる此の一言は信吉をして思はず熱涙を流さしめた。

「オイ君ッ、此奴は泣いて居るせ」

と、他を顧みに一學生は。

「時に此の頃僕等の級でよく品物が無くなるが、ヒョツとしたら犯人は此の下村だ
せ」

此の言葉に付いた他の學生も。

「どうも此奴が放校後級の中を掃除なぞして歸るのが變だと思つて居たが、成程、
此の野郎が他に目的があつてあんな真似をして居たんだ、屹度夫れに違ひ無い、僕
なぞは數日前にニツケルの時計を盗まれてしまった、質に置けば牛肉屋で一醉を買
ふ事が出来たのに」

と云ひ乍ら、信吉の片袖を捉へ。

「下村、貴様だらう、我れくの机の抽斗の物を盗み出すのは……」

餘りの暴言に堪へ兼ねた信吉が。

「諸君ッ……」

と、凛乎として一同の面を睨め付け。

「僕は不幸にして學費が無いので止むを得ず、斯んな勞働をして通學をして居ます
が、渴しても盗泉の水は飲みませんが、言ふ事もあらうに盗人とは何を証據として
公言されたのです、不肖ながら北越の青年にはそんな心の腐つた奴は一人も居ませ